JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS
MARCH
2024

3

特 集

派遣国と隊員をつなげる橋渡し役

ナショナルスタッフだから見えること

クロスロード

2024 MAR

Contents

表紙によせて

日本語教育の活動で大学に赴任しましたが、コロナ禍もあり授業はずっとオンライン。対面でできることを模索して2年間を過ごしてきました。ある日、放課後の児童を預かっているホームステイ先の大家さんから、日本文化として人気がある折り紙の教室を頼まれて二つ返事！風を受けてくるくる回る風車にみんな大喜びでした。森田英津子さん（SV／ウルグアイ／日本語教育／2016年度1次隊、2018年度9次隊、エルサルバドル／日本語教育／ 2022年度7次隊・大阪府出身）

2 子どもたちに伝えたいSDGs —世界の学校

3 ■Contents ■索引

4 JICA Volunteers' Reports

特集
6 派遣国と隊員をつなげる橋渡し役
ナショナルスタッフだから見えること

14 派遣国の横顔 ブータン
～知っていますか？派遣地域の歴史とこれから

21 いま、読みたい電子書籍

22 専門家に聞きました！
失敗に学ぶ ～現地で役立つ人間関係のコツ

24 この職種の先輩隊員に注目！ ～現場で見つけた仕事図鑑

26 ひきつけるアイデアを共有
みんなの教材づくり＆アクティビティ

28 先輩隊員のシューカツ記

30 派遣から始まる未来
進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

32 JICA海外協力隊派遣現況

33 INFORMATION ～JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ～

34 あの日、地球の、あの場所で。

35 隊員めし 任地の食生活に彩りを！

36 公開！ 私の派遣国生活

■国別索引	掲載ページ
インド	34
ウルグアイ	1
エルサルバドル	1、26
エクアドル	24
ガーナ	23
キルギス	24
ジンバブエ	23
スリランカ	19
セネガル	5
チュニジア	35
パラグアイ	4
フィジー	36
フィリピン	24
ブータン	16、17、18、19、21
ブラジル	24
ボツワナ	2
モザンビーク	28
ルワンダ	30

■職種別索引	掲載ページ
プログラムオフィサー	23
建築	16、21
建築施工	16、21
家畜飼育	17
野菜栽培	4、30
レスリング	5
柔道	18
野球	23
PCインストラクター	28
日本語教育	1、34
小学校教育	2
手工芸	19、26
料理	24
婦人子供服	19
文化	19
農産物加工	24
栄養改善	24
バレーボール	35
高齢者介護	36

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	28
秋田県	35
宮城県	17
栃木県	19
東京都	30
神奈川県	16、18、21、24
静岡県	4
大阪府	1、36
兵庫県	5、23
奈良県	26、34
愛媛県	2
佐賀県	24

『クロスロード』（通常号）は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元をする際の情報を提供する雑誌で、年に10回発行しています。
編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局

【凡例】
JICA海外協力隊の隊員（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ケニア／環境教育／2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

「JICA海外協力隊」には「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。

主に算数の基本の定着に取り組んだ田原さん。
「九九が覚えられたことが嬉しくて、放課後に報告に来る子もいました」

子どもたちに
伝えたいSDGs
世界の学校

30分間の集中と五感を使った授業で算数の基礎の定着に取り組みました

田原尚子（たはらしょうこ）（旧姓 井上）さん（ボツワナ／小学校教育／2018年度1次隊・愛媛県出身）

配属先は首都から約100キロ離れた地方都市カニエにあるロハバ小学校で、未就学児から7年生まで約300名が学んでいました。ここでは算数と理科の学力向上が課題となっており、私への要請は児童に対して授業を実施することでした。

授業は、朝の7時20分※から午後1時すぎまで行われるのですが、休憩時間は給食の時のみだったため、授業に集中できない児童が多いことが気になりました。

算数では、基本となる四則計算（かけ算、割り算など）や基本用語（図形の名前など）が児童に定着していないため、新しい単元の習得に専念できない状況でした。

そこで、まず私は基礎学力を向上させるための授業を考え、ボツワナ人は、歌やダンスが大好きなので、五感を使って楽しく学べるようにしました。九九の授業では、最初にかけ算の仕組みを教えてから、リズムに乗って私が作った九九の歌をみんなで歌って覚えます。基本用語を教える時も同様に、リズムに乗って、声を出して、楽しく学習することを目指しました。

基礎学力が定着したクラスから、実践問題を解く授業に移行し、最終的には全学年合わせて11クラスを担当しました。

授業の開始にあたっては、全員そろって姿勢を正し、「おはよう」と日本語の挨拶で始めます。前半は体を動かしながら知識をインプットし、後半は九九のチェックシートや100マス計算を使ってアウトプット、と一貫した授業の流れを確立し、30分間は授業に集中できるようにしました。1年後には、児童の計算のスピードと正答率、期末試験の成績もアップしました。

子どもたちや先生方、保護者の方から「ショウコありがとう」と言われたこと、乗り合いタクシーの中で居合わせた親御さんが、子どもから教わったと九九の歌を歌ってくれたことを嬉しく思い出します。

Text＝工藤美和　写真提供＝田原尚子さん

※ ボツワナの小学校では、雨期（夏時間）は7時20分、乾期（冬時間）は7時50分と、授業開始時間が異なる。

JICA Volunteers' Reports

派遣先での協力隊員の活動や、OVの活動をリアルにレポート

from Paraguay

パラグアイで「四角いスイカ」の栽培を通じて収入向上も含めた農業の楽しさを伝えたい

松井正樹（まついまさき）さん（パラグアイ／野菜栽培／2021年度5次隊・静岡県出身）

国立アスンシオン大学農業科学部カアサパ分校で、土壌管理の実践指導や、教員と学生の研究支援のほか、新しい農業技術の紹介として、薬用植物でもあるミントの無菌培養技術も実践指導しています。

パラグアイの農業は理にかなっています。植物を植える前に肥料と土壌改善のための石灰を入れて、後は放任栽培。育った野菜のうちで出来のいいものだけを収穫するやり方です。日本のように狭い農地で、機械を取り入れ、肥料や農薬を惜しみなく投入して、高価な作物を効率的に栽培する農業とは対照的といえるでしょう。

私が実践してみせている日本式栽培方法は、成長に合わせて肥料を追加しなくても済むように、余分な枝、花、実を取り除くことで、収穫したい部分に養分を集中させるやり方です。トマト、タマネギ、スイカを標識を立てて学生たちに見せながら栽培しています。よく観察して手をかければ、収穫量と品質が良くなることを伝えたいからです。

農業には収入を上げていく工夫も必要です。「まだ誰もやっていないことをやってみる」ことでひらめきを得られると思います。そこで実践しているのが四角いスイカ作りです。

四角いスイカは、香川県農業協同組合の善通寺西瓜部会を中心として開発されて、日本では1万円前後で販売されています。もちろん、パラグアイではほとんど知られていません。

作り方は、大きくなりそうなスイカの実を見極めて、四角い箱をかぶせるところから始まります。球体よりも立方体のほうが体積が大きいので、小さなスイカでは四角いものは作れません。大きくなり過ぎて箱が割れないように未成熟のうちに収穫します。

スイカは追熟（※）しないため、四角いスイカは2カ月ほど日持ちします。あくまで観賞用です。市場で展示した際は、大学名と教授名を表示して、大学のPRになるようにしました。四角いスイカの珍しさに普段以上の人々が集まり、他の商品を買ってもらえば、収入も増えます。

教員や学生もおいしいスイカを作る技術はありますが、回り回って収入を増やすための知恵や工夫も大事だと思っています。現在、新しい箱を皆の協力で作り、さらに大きな四角いスイカを栽培中です。

私自身がパラグアイで学んだことも少なくありません。大学には国内トップレベルの教授がいて、学生たちに作物の単価計算をさせて発表させるなどの先進的な授業をしています。大いに刺激を受けました。

協力隊に参加するまでは、静岡県内の農業高校の教員として39年間勤務していました。「有機JAS認証」を取得し、栽培した作物を生徒と共にファーマーズマーケットに出荷・販売したこともあります。作ったものを売る、売れるものを作ることが本当の農業の楽しさだと私は感じています。

帰国後は、高校生や市民向けの農業講師に戻る予定です。パラグアイで得たことを含め、今までの経験を日本にも還元していきたいと思っています。

1 四角く育てたスイカを手にする松井さん（右）と農学部の教授
2 大学の農場で収穫した四角いスイカを枠から取り出すところを興味深く見入っている学生たち

※追熟…果物などの収穫後に時間を置くことで甘さを増したりやわらかくしたりする処理のこと。

Text＝大宮冬洋　写真提供＝松井正樹さん

from Senegal

任地に戻ってレスリング普及に尽力中 アジア人初のセネガル相撲選手として自ら広告塔に

魚住彰吾（うおずみしょうご）さん（セネガル／レスリング／2016年度3次隊・兵庫県出身）

2026年にセネガルで開催される第4回夏季ユースオリンピック。晴れ舞台で行われるビーチレスリングの試合に、教え子のレスリング選手を出場させる――。それが私の目標であり、協力隊の任期が終わった今もセネガルで活動し続けている理由です。

私は隊員時代、1歳年上のシェールというレスリング選手と共に競技の普及に取り組みました。セネガルで次世代を担う若年層の競技人口がいないという課題に着目し、地域のスポーツ行政機関らとの連携で国内初の少年少女レスリング教室を開設。0人だった青少年の競技人口を50人まで増やすことができ、少年少女のレスリング大会も開催できました。

しかし、2年間の活動だけではレスリングを普及できたとはいえません。中途半端な形では終わらせたくないとの思いもあり、帰国とコロナ禍を経て22年4月にセネガルに戻って、教室の運営を継続しています。

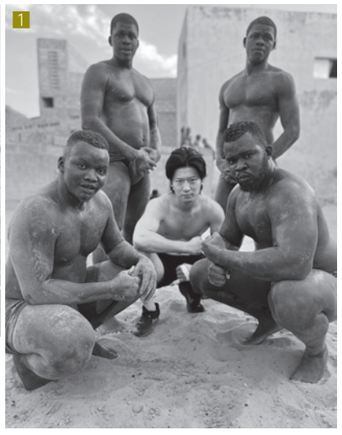
ただ、レスリング普及を進めるには、この活動をセネガルでもっと周知することが必要です。そこで思い立ったのが、私がアジア人初の「セネガル相撲」の競技者となることです。違うスポーツじゃないかとツッコまれそうですが、実はセネガルのレスリング協会はセネガル相撲協会の傘下で活動しているのです。しかも現地ではサッカーと並ぶ人気のスポーツなので、私自身が競技者として有名になって発言が注目されることで、少年少女レスリングの知名度も上げられるだろうと狙ったのです。

セネガル相撲はこの地域の伝統的な格闘技で、レスリングに似ていますが、ふんどしをつかめる、点数の積み上げ式ではなく決まり手で勝負がつくといった点で異なります。レスリングのタックルなどは通用しにくく、独特な駆け引きとテクニックが魅力。今は階級別のトーナメントでチャンピオンになることを目指しており、戦歴は1勝1敗です。以前出場したトーナメントでは86キロ未満の選手がまとめて軽量級に組み込まれる階級区分になっていたので、171センチ71キロしかない私は背の高い相手に見下され、「おまえはサッカー選手だろ？」などとからかわれたりもしました。

しかし、何度も大会に顔を出してテレビにも出演し、各種SNSで発信を続けてTikTokのフォロワーは28万人に。今やセネガル中に私の存在は知れ渡っています。おかげでセネガル相撲協会の関係者とも顔見知りで、私の活動を話すと「君はセネガルに貢献している！必要なことは通せるように協力する」と言ってもらえます。

下半身を鍛えるなどの基礎トレーニングは、レスリングとセネガル相撲のいずれにも共通して有効です。レスリング教室でこうした練習をきちんと積めばいずれの競技にも通用しますし、総合格闘技などに進む人も出てくるでしょう。子どもたちがどの道にもシフトチェンジできるようになればいいと思います。

今後、ユースオリンピックの結果によって目標も未来も大きく変わっていくので、以降のことは未定の状況。今やるべきことに日々集中して活動を続けています。



1 セネガル相撲の選手たちと魚住さん。日本から来て活動していることを強調して“ボーイ・ジャポネ”のリングネームを名乗っている
2 レスリングの練習風景。コロナ禍で後任隊員の派遣が中止となる状況下でも、親友のシェールが取り組みを続けてくれていた

Text＝大宮冬洋　写真提供＝魚住彰吾さん

特集

派遣国と隊員をつなげる橋渡し役

ナショナルスタッフだから見えること

2023年12月、世界8カ国のJICA拠点から、ボランティア事業担当のナショナルスタッフ（以下、NS）が来日。派遣国をよく知る中核人材としての役割を改めて整理し、これからの時代の働き方やNSとしての成長について議論するため、約10日間の研修が行われました。今回はそんな皆さんにNS代表となってもらい、その仕事内容をお聞きしつつ、JICA海外協力隊へのメッセージを頂いてきました。

JICAマダガスカル事務所

ラスアナリヴ・デボラさん

Welcome to Madagascar

地元の暑さ、寒さ対策は？

暑さ対策としては、現地ではアイスを食べたり、ココナッツウォーターを飲んだりしています。ただ、マダガスカルでも首都のある中央高地は寒くなることがあるので、そんな時には温かいコーヒーを飲むか、暖炉の近くにいるのがいいですね。

お薦めストレス解消法

街から離れて最寄りの公園（首都アンタナナリボならチンバザザ動物園など）などの自然豊かな場所を訪れるのがお薦めです。旅行であれば、バオバブの並木があるムルンダバや、レミュール（キツネザル）と触れ合える国立公園、イルカ・クジラがいるサント・マリー島への訪問がお薦めです。

――これまでの経歴は？

私は2018年にボランティア事業のプログラムオフィサーとしてJICAマダガスカル事務所に入り、今に至ります。

――現在の担当業務は？

業務内容は、マダガスカルに派遣された隊員の皆さんの活動がスムーズに進むよう後方支援すること。住まいの確保をはじめとして、地域コミュニティや受け入れ団体との連携がうまくいくように、隊員の皆さん自身が着任する前から、さまざまな調整を行っています。さらに、新規の隊員要請があった時は橋渡し役として配属先に連絡を取り、制度の説明や受け入れにあたってのアドバイスもします。

JICAのボランティア事業は、地域コミュニティや配属先の双方に得るものがあり、隊員自身も活動の中で成長でき、Win-Winの関係にあることが素晴らしいと感じています。私自身も皆さんの活動を通じて、特に教育分野に関していろいろ学ばせてもらっています。

――隊員へのアドバイス

これからマダガスカルにやって来る隊員の皆さんに共通して伝えたいことは、この国は日本とは全く違った文化を持っているということです。そのために多かれ少なかれカルチャーショックを感じることもあると思いますが、それは根本的に価値観が相いれないのではなく、生活の習慣や様式の差から来るものでしょう。ですから、活動を続けていくに際しては、マダガスカルの日常生活を知ることがとても大切だと思います。

マダガスカルの隊員の皆さんは、それぞれの性格や興味によって異なるさまざまな相談を私に持ちかけてくれます。皆さんから信頼してもらい、この国での活動を快適で生産的なものにしてもらうことが私の目標なので、皆さんには活動状況や任地での生活の様子をよく聞きます。ただし、問題があった場合は、まずは配属先や大家などの近所の人に相談するように促し、隊員自身で解決できるよう心がけています。そうすることで、周りの方々との関係が構築され、有意義な活動につながると考えるからです。時に孤独や悲しみを抱えてしまうことがあると思いますが、一人で悩まず、ぜひ周囲に相談できる現地の友人をつくってほしいと思います。

マダガスカル人と接する上で一番大事なのは、ポジティブな意識です。そして、この国では「みんなで協力して助け合う」ということが一般的な考え方なので、前向きな気持ちで人々と接していれば、きっと周りの皆が協力してくれます。

マダガスカル事務所で働く仲間たち

JICAネパール事務所

ラガブ・カヤストさん

Welcome to Nepal

ネパールの好きなところ

ヒンドゥー教のお寺がたくさんあって、週末に家族でよく訪れます。ヒンドゥー教徒でない観光客が入れる寺院もあり、気持ちが落ち着いてゆったりした気分になれます。

お薦めのお店

首都カトマンズには蕎麦や寿司の店があり、カツ丼や定食もあって、おいしいですよ。日本の味が懐かしくなったらぜひ！

お薦めストレス解消法

一人で考え込まず、とにかく誰かに話してアドバイスを求めることが大切。私にもぜひ相談してください。これまでネパールに派遣された隊員の中でネパールの音楽や踊りを習う隊員がいましたが、音楽やダンスでストレスを和らげるのもオススメです。

――これまでの経歴は？

私は2001年から日本へ留学して大学および大学院で学び、その後、日本の開発コンサルタント企業でインターンとして政府開発援助（ODA）プロジェクトに携わりました。ネパールの首都カトマンズからインドとの国境地帯に幹線道路を通すJICAによる「シンズリ道路建設計画」ではネパールで現地調査を行ってレポートを提出するなどの仕事をしていました。そこで「地域の人と話したり情報収集したりする仕事は面白い！」と感じていたところ、JICAネパール事務所がネパール人のボランティア事業担当者を募集していると知って14年に入職。今年で10年がたちます。

――現在の担当業務は？

担当しているのはさまざまな機関からの協力隊員の派遣要請の調整、隊員の語学研修、宿泊先の手配までさまざまで、多くは日本人の企画調査員「ボランティア事業」（以下、VC）との共同作業です。私はネパール国内の配属先などの要請を見ながら英語の要請書を作成したり、VCが本部から受け取った日本語の資料を英語で作成したりと、協力しながら進めています。

活動中の隊員の任地を視察する様子

活動中の隊員とも定期的に連絡を取り、困り事などがあればサポートしますが、やはり大切にしているのは皆さんとのコミュニケーションです。言語はもちろん、文化や習慣を教えることで、活動がスムーズに進むよう支えています。また、住居の安全対策も重要な業務で、複数のナショナルスタッフが力を合わせ、少しでも安心・安全な住居を確保できるよう努めています。

――ボランティア事業に思うことは？

ネパールには世界各国からボランティアが派遣されているのですが、公用ビザで活動する協力隊は独特だと思います。一定の安全管理の下で、農業やコミュニティ開発、教育、保健分野の隊員が多く派遣されてきましたが、最近では剣道のベテラン指導者が武道の普及に貢献されたりもしています。JICA以外の組織ではスポーツ分野のボランティア活動はあまりなく、他の国が取り組んでいない日本ならではの支援分野の一つといえるでしょう。

隊員の皆さんは大学を出て社会人経験を積んだ後、新しいことにチャレンジしようとして参加される人が多い印象ですね。翻ってネパールでは、大卒であっても就職先が少なく、卒業後すぐに経験を積むことができない方たちもいるので、基本的な社会システムをもっと向上させなければいけないと痛感します。

Text＝新海美保＆飯渕一樹（本誌）　取材協力＝岡部繁勝　Photo（NS近影）＝飯渕一樹（本誌）写真提供＝各在外事務所・支所

そもそもナショナルスタッフとは？

協力隊員として派遣国で活動している場合、それぞれの国のJICA事務所・支所には、日本人のVCや在外健康管理員がいたりするので、日々の活動や生活の中での困り事は、もっぱらそうした日本人スタッフに相談することが多いかもしれない。

ただ、各国のJICA拠点では現地雇用の「ナショナルスタッフ」と呼ばれる職員が働いている。その国の出身者が採用されていることが多く、それぞれの職分によって、事務所・支所の管理や運営に当たる総務・経理から、各種プロジェクトの企画や実施、ファシリテーションまで幅広い分野の人材がいる。

中でも、ボランティア事業を担当するNSは事業の要で、隊員にとっては縁の下の力持ちというべき存在である。なぜなら、VCなどの日本人スタッフと比べて現地語や現地の社会・文化、国民性などに通じているNSは、諸手続きや各関係組織との交渉には欠かせない存在だからだ。隊員本人が赴任してくる以前から、受け入れに向けたさまざまな業務を行ってくれている。

例えば、今回の研修で来日したネパール事務所のラガブ・カヤストさんは日本語能力を生かして要請書の作成段階から関わっているほか、「隊員の現地語学訓練のための学校や宿泊先の手配も行っています」と話す。また、タイ事務所のジャールック・ユクトンさんは「配属先とやりとりしながら、赴任してくる隊員の生活に適した住居を確保する」業務にも従事している。その他にも、ビザの取得に関する手続きや、空港に到着した隊員たちの迎え、逆に帰国する隊員の手続きといった業務もNSが対応している。

隊員に対し、現地スタッフならではのサポートをしている人もいる。例えば、ベリーズ支所のマルビア・デュボンさんは、「中南米では、挨拶で異性同士でもハグやキスなどをしますが、シチュエーションによるやり方の違いを、事前に隊員の皆さんに指導しています」。マダガスカル事務所のラスアナリヴ・デボラさんは「隊員の皆さんとお話しする機会には、練習のため現地語を話したり、時にはマダガスカルの文化や国民性について紹介したりもしています」と話す。

また、パラオ事務所のユウル・エメシオールさんは、「パラオの人々はとても声が大きいので、日本人は初めのうち驚くかもしれません。着任した隊員の皆さんにも『声が大きいからといって脅迫しているわけじゃないから大丈夫だよ』と冗談を交えながら伝えています」と言う。

「隊員の皆さんにとって、文化も言葉

JICAガーナ事務所

フィデリス・トゥーリさん

―これまでの経歴は？

私の母はJICAの健康管理プロジェクトで助産師として働いていて、私も昔からJICAのことはよく知っていました。大学生の時にガーナ国内のNGOで活動する中で3人の協力隊員と知り合って日本文化などについて教えてもらい、子どもの頃からの憧れだったJICAに対する気持ちがもっと大きく膨れ上がりました。その後、採用試験を受けるチャンスが来て、JICA事務所で働いています。

―現在の担当業務は？

ボランティア事業のプログラムオフィサーをしています。主な仕事内容は、協力隊員派遣の要請を集め、VCが日本語で要望調査票を作成するのを支援します。ガーナで活動する隊員の皆さんが到着した後も、国についての理解を深めるためのオリエンテーションを実施したり、現地語学訓練のための連絡調整などさまざまなサポート業務を担当しています。また、派遣要請のあった機関や学校などの担当者やカウンターパートと、隊員に対する研修も行っていて、研修を通じて、協力隊員の派遣や活動に関する条件、日本人とガーナ人が協働する際のコツなどを理解してもらっています。

隊員とカウンターパートを交えたワークショップを実施

―隊員へのアドバイス

どの土地に行くか、どんな組織に行くかによって違いはありますが、ガーナ各地には独自の生活文化があるので、活動中の隊員の皆さんにはその中で生活する方法をアドバイスしています。

もう一つ、ボランティア事業の担当として感じている大切なことは、間違いを恐れずにコミュニケーションを取ることです。着任したばかりの頃は、英語でも現地語でも思うようにコミュニケーションを取れないことがあるかもしれません。すると怖くなり、余計に話しづらくなる方もいます。そういう隊員にアドバイスしているのは「間違いを恐れず自由に話をしましょう」ということです。一言、現地の言葉で挨拶をするだけでも現地の人たちは喜んで受け入れてくれるはずですから。

―隊員に思うことは？

私が考える協力隊員の強みの一つは、赴任した土地の生活や言葉を吸収する適応能力です。ガーナには公用語の英語以外に、チュイ語やガ語、エウェ語など約70もの現地語がありますが、多くの隊員が、赴任からさほどたたないうちにまるで現地で育ったかのように言葉を操っていて、「よくこんなに早く習得し、流ちょうに話せるな」と驚かされます。現地の言葉で話ができるというのはその土地の人々に受け入れられる第一歩なので、これは重要なスキルです。

Welcome to Ghana

▌地元の暑さ、寒さ対策は？

気候の変化は、気持ちをオープンにして何でも受け入れられるよう心の準備をしていれば、適応できるというのが私の持論です。同様にガーナの人々に対してもオープンな心で接すれば、現地文化に適応できるとガーナ隊員にアドバイスしています。

▌お薦めストレス解消法

やはり食べることはストレスを解消することにつながるので、ガーナにたくさんある地元のグルメを楽しむとよいと思います。代表的なのは「フフ」という食べ物で、キャッサバと調理用バナナをゆでて日本のお餅のようについて作る主食です。トマトスープやピーナッツスープと一緒に食べる料理ですが、多くの隊員の好物になっています。

▌現地の日本食事情

ガーナ事務所の近くにも日本食レストランが2軒ありますが、私は焼きそばが好きですね。

JICAエルサルバドル事務所

ジェシー・サラビアさん

―これまでの経歴は？

私は大学卒業後、エルサルバドルのNGOで子ども支援や福祉事業に携わりました。2011年、新聞でJICAエルサルバドル事務所の求人を見て、母国の発展に携わることができることと安定して働ける環境に魅力を感じ、応募しました。

―現在の担当業務は？

ボランティア事業担当のスタッフとして、隊員の派遣を継続的に運営するため、配属先やホストファミリーとの関係を大切にし、新しい受け入れ機関の開拓や広報活動にも力を入れています。コロナ禍で中断していたエルサルバドルへの協力隊派遣は22年4月に再開し、地域開発や保健、教育、防災、スポーツなどの分野で現在19人の隊員が活動しています。配属先での活動以外にも日本文化イベントなどを通じて両国の親善に尽くしています。

私が日々の仕事の中で特に意識しているのは、隊員の皆さんと頻繁に連絡を取ること。異国での暮らしや健康管理、そして配属先での活動がうまくいっているか確認しながら、少しでも快適に過ごせるようサポートしています。

―隊員に思うことは？

エルサルバドル事務所で働き始めてからかれこれ12年がたちますが、私はこの仕事が大好きです。歴代のエルサルバドル隊員の皆さんとの出会いは、いずれもとても印象深いものですが、中でも短期派遣で地方に赴任した音楽隊員のことはよく覚えています。学校で音楽を教えていた隊員で、短期派遣は語学研修がないという事情もあって配属先やコミュニティの人たちとのコミュニケーションには苦労していましたが、私は彼女に「エルサルバドル人はどんな時も笑顔を絶やさない人々なので、恐れずに受け入れる心を持って接していれば気持ちは伝わる」と伝えていました。やがて、彼女は学校の生徒や地域住民からとても愛される隊員となりました。それは彼女が活動や人々に対して、深い愛を持って接していたからでしょう。

JICA事務所に入職する前、他国から派遣されているボランティアと接したことがありますが、彼らの多くは英語を話します。他方、協力隊員はエルサルバドルの人々が日常的に使うスペイン語で話そうと努力をしています。拙い語彙力でも一生懸命会話しようと努力し、すごい速さで適応していく姿に感銘を受けています。これからも隊員の皆さんを支える仕事を続けていきたいと思っています。

JICAのイベントブースにて隊員と

Welcome to El Salvador

▌お薦めエルサルバドル料理

エルサルバドルの名物料理といえば、「ププサ」。とうもろこし粉の生地の中に、豆のペーストや肉、チーズなどを包んで平たく伸ばして鉄板で焼いた料理で、1ドルほどで手軽に食べられますよ。

▌お薦めストレス解消法

海の周りを歩いたり、食べたいものを食べたりするのがいいですよね。ぜひ、好きなことをしながらリラックスできる時間をつくってください。

▌現地の日本食事情

エルサルバドルには日本食レストランがあります。ただ、私は和食の中でツナおにぎりが好きなのですが、エルサルバドルの日本食レストランのメニューには日本のようにおいしいおにぎりがなくて残念です。

も日本とは全く異なる国での暮らしは大変だと思いますが、長い目で見れば良い経験。とても貴重で尊い活動だと思いますし、皆さんをサポートするこの仕事にやりがいを感じています」と隊員への思いを口にするのは、エルサルバドル事務所で12年来勤務しているジェシー・サラビアさんだ。「『困ったことがあったらいつでも言ってほしい』と伝えながら、エルサルバドルでの活動や暮らしを支えられる存在になれるように頑張っています」。

日本人ＶＣとの役割の違いは？ ＮＳの強みと弱み

隊員の活動を支える重要な存在である、ボランティア事業担当のＮＳたち。ＶＣのパートナーとして位置づけられているものの、実際にはその立場が裏方やサポーター的なものにとどまってしまっているケースも多いことが課題だという。そこで今回、特に職場で中核的な役割を担っているモデル的な8人のＮＳを日本に集め、今後の人材育成につなげるための研修が実施された。

都内の青年海外協力隊事務局と、長野県の駒ヶ根青年海外協力隊訓練所で行われた研修では、協力隊事業や広報活動などへの理解を深めるための講義や、駒ヶ根訓練所での候補者らとの交流のほか、今後のＮＳ向けの研修を企画するための布石として、参加した8人によるＮＳの役割についての議論も行われた。

議論の中では、ＮＳの強みとして、「現地の伝統や言語などに通じていること」が改めて挙げられたほか、「国内の法制度や地理についての情報、現地のニーズ」も、ＮＳが深く知っている要素としてピックアップされた。また、「数年で任期が終わって交代してしまう日本人ＶＣと比べ、ＮＳは長く同じ事務所・支所に勤務している場合が多く、そうしたベテランのＮＳのほうが、これまでの現地の受け入れ団体とのやりとり・取り組み・成果の歴史をよく把握できる」といった意見も上がった。

一方で、ＮＳの苦手な部分としては、日本の組織文化や労働環境への理解不足があるほか、日本のＪＩＣＡ本部などとの連絡文書や職務上重要な内部資料が日本語で書かれており、どうしても日本人主導となることから、ＮＳが後方支援に回らざるを得なくなる状況も改めて確認された。

研修の最終日には、参加したＮＳたちによる、将来的なＮＳ向け研修を想定したコンセプトペーパーの発表が行われた。研修期間を通じて実施した一連の意見交換によって整理したＮＳ・ＶＣ双方の強みと弱みを踏まえ、研修の目的や講義内容などの項目を設定。また、今後に向けて、「日本語

JICAタイ事務所

ジャールック・ユクントンさん

Welcome to Thailand

暑さ対策

タイはなんといっても暑い国です。室内ならエアコンや扇風機をつけ、野外ならば直射日光が強いので肌の露出をできるだけ避けて十分な水分補給を忘れずに。ですが、もちろん水道水は飲まないでくださいね！

ストレス解消法

私は昔から走ることが趣味で、一番のストレス解消法でもあります。今回の来日中、東京でも皇居の周りを走りました。フルマラソンの大会では13回完走しています。

タイの料理事情

タイ料理といえば、トムヤムクンやパッタイが有名ですが、他にもタイ北部にはおいしいソーセージ料理があったり、東北部のイサーン地方の料理はとても辛いことで知られていたりと、バラエティに富んでいます。

―これまでの経歴は？

私は前は民間の銀行で働いていて、友人からＪＩＣＡタイ事務所での仕事について耳にした時、大学で日本語を専攻していたこともあって興味を持ちました。気づけばもう9年目。9という数字はタイでは縁起がいいので、特に感慨深く思っています。

―現在の担当業務は？

ボランティア事業担当としての私の仕事は、隊員の安全管理や住居の確保、予算管理、配属先との連絡・調整など多岐にわたります。特に赴任する隊員のアパート探しでは、長期で滞在する隊員が安全な環境で暮らせるようにセキュリティ面を重視していて、できれば警備員がいる住居を探し、地域の条件によっては下宿やホームステイなど、あらゆる可能性を検討しています。

発展の進むタイで、ＪＩＣＡタイ事務所は都市と地方双方の産業人材の育成や社会的弱者のための支援に力を入れています。協力隊員もこうした取り組みの担い手として派遣され、人々の能力向上や両国のつなぎ役として重要な存在となっています。

―隊員へのアドバイス

タイには、タイ外務省国際協力機構のボランティア派遣プログラム（ＦＦＴ）があり、２００３年から周辺国へタイ人ボランティアを派遣しています。数年前、タイ外務省の担当者がＪＩＣＡ事務所を訪れ、熱心にボランティア事業やその手続きなどについてのアドバイスを求めてきたことがありました。現在ＦＦＴは日本にも派遣されており、ＪＩＣＡもこの派遣に協力しています。日本とタイ、お互い学び合いのステージが始まっています。これまで長い間日本からの支援を受けてきたことを、タイの人々はよく知っています。両国には深い親交の歴史があり、いわばタイ人は日本の一番の「ファン」ですから、皆さんがタイ社会に対してオープンな気持ちで接すれば、多くの人は大歓迎してくれると思います。

野球指導を行う隊員の配属先への視察

隊員の皆さんから活動について時々受ける相談は、「誤解」を解くことで解決できる問題がほとんどです。目指す目標にズレがないか、共に働く人と密にコミュニケーションを取りながら活動しましょう。

タイ人は自国を「ほほ笑みの国」と呼びます。もちろんいつも笑顔でいるわけではないのですが、この国にはほほ笑みがあふれています。隊員の皆さんはすでに「共に働くボランティア」として認識されていて、人々は「友だちになろう」と考えています。困ったことやわからないことがあれば、何でも地域や配属先の人に相談してください。何でも〝分かち合う〟という気持ちがあれば、解決できることも多いはずです。

JICAパラオ事務所

ユウル・エメシオールさん

Welcome to Palau

パラオの人と仲良くなるには？

パラオ人は食べることが大好き。仲良くなるには、パラオの食事を積極的に楽しみながら、パラオの人との交流を深めてください。笑いを誘うコミュニケーションで、ユーモアも忘れずに。

現地の日本食事情

パラオでは寿司などの日本料理を食べられる場所は身近にあります。ただ、私はカツカレーが大好物なのですが、これはなかなか食べられません。日本にまた来る機会があったら、必ず食べたいです。

パラオの料理

パラオの食事は魚が多く、スープにするほか、揚げたり焼いたりもして食べます。主食はタロイモで、ココナッツミルクと混ぜて使います。タピオカも身近な食材ですよ。

―これまでの経歴は？

私の協力隊員との最初の出会いは、学校に来ていた日本人の先生で、とても印象的でした。また、大学生の時に交換留学プログラムで沖縄に2年間滞在したこともあって日本が大好きになりました。帰国後に仕事を探す中、ＪＩＣＡはボランティア事業のみならず、母国の発展を支援する多様なプロジェクトを展開していると知り、パラオにいながら日本の人々と働ける環境に大きな魅力を感じました。

―現在の担当業務は？

ＪＩＣＡパラオ事務所は２０２１年に「支所」から「事務所」に替わり、今は新オフィスでスタッフを増員しています。日本人・パラオ人合わせて10人以上が働いていて、私はパラオで活動する協力隊員の派遣前から派遣後まで全プロセスに携わっています。

パラオでは教育や保健医療、農・水産業、廃棄物管理などの分野で隊員が活躍していますが、一人ひとりと積極的にコミュニケーションを取ってそれぞれの性格や考え方を知り、深く密な関係性を築けるよう努力しています。もちろん、一人ひとりの安全を守ることも大切な仕事です。

―隊員へのアドバイス

皆さんからよく受ける相談は、パラオの人々の働き方などの話題です。パラオ人はのんびりしていて、仕事は丁寧ではないかもしれません。でも、すぐに批判したりせず、穏やかな視点を持ちながら活動を進めてほしいと願っています。以前、やる気に満ちあふれ、少しでも早く成果を出そうと頑張っている隊員がいましたが、迅速に動くあまり同僚や周囲の人の存在を無視して一足飛びでトップの立場にいる人へ交渉を持ち込み、周囲を混乱させる結果になってしまいました。２年で目に見える結果を出すのは難しいでしょうが、配属先や周囲の人たちに配慮しながら一緒に活動を進めていくことも意識するといいでしょう。

もう一つ、パラオならではの文化や習慣もあります。以前学校に赴任した隊員から「同僚の教員からお金を求められたがどうしたらいいか」と聞かれたことがあります。聞けば、その同僚の親戚が亡くなり、その葬儀に必要な資金を隊員にも求めたようですが、パラオでは知人の関係者が亡くなった際には親戚関係でなくても資金を支援する習慣があります。わからないことがあったら、ぜひ私たちに聞いてほしいですね。

今、協力隊の皆さんは私にとってわが子のような存在で、心から応援しています。配属先での活動がうまくいくように、できる限りのサポートをしていきたいと思います。

パラオに到着した隊員たちとのフィールドトリップにて

で書かれた資料についても最低限の情報共有が必要。例えば、協力隊員が何かを尋ねて私のところへ来た場合に、NSとVCのどちらが対応すべき案件なのか判断し、速やかに隊員を支援するためにも、基本的な情報を共有しておくことが重要」といった提言が出た。

さまざまな課題の整理や、NSとVCの業務の区分けなどは即座に進むものではないだろうが、こうした背景があることは、事務所・支所のスタッフと関わる隊員たちも知っておいて損はないはずだ。

今後に向けてNSとしての成長を目指す

研修を経たNSからは、今後の業務に向けた意気込みや感想も聞かれた。

2019年からベリーズ支所で働いているマルビア・デュボンさんは、「駒ヶ根訓練所で訓練中の候補者との交流を通じ、彼らがそれまでの人生で何を経験し、なぜ協力隊員になろうと決めたのか知ることができたのは有意義でした。これまでも隊員たちに共感を持って仕事をしてきましたが、より一層共感できるようになりました」と訓練所での滞在を振り返り、「訓練所の講師や他国のNSと直接対話することもでき、私たちNSにとってより良いコミュニケーションへの扉が開かれました」と述べた。

同じく19年にガーナ事務所へ入職したフィデリス・トゥーリさんは、「日頃は会うことのない本部の職員と交流できる良い機会になり、とても嬉しかったです。他国のNSたちとの議論の中でも多くのことを学べたので、ここで得たことをガーナに戻って生かしたい。業務に対する新たなイメージとより強い気持ちを持って、自国でのボランティア事業に取り組めると思います」と話す。

エジプト事務所のベテランスタッフであるアミーラ・ラーファトさんも、他国のNSとのつながりについて「自国のスタッフと他国のJICA拠点のスタッフとの間にはあまり多くの関わりがないので、各国の同僚からそれぞれのユニークな取り組みについて学ぶ良い機会でした」として、「このつながりはもっと強化されていくと思いますし、今回は参加していない他国のNSにも拡張されていくとよいですね」との期待を寄せた。

普段、あまり接する機会がないかもしれないNSだが、スタッフたちは担当する協力隊員に大きな関心と敬意を持ち、より良いサポートをできるよう腐心している。とりわけローカルな現地事情などについて、NSは多くのことを教えてくれるはずだ。遠慮することなく、活動や生活の悩みを相談してみよう。

JICAベリーズ支所

マルビア・デュボンさん

Welcome to Belize

ベリーズってどんな国？

中米に位置するベリーズにはカリブ海に浮かぶ450の離島もあり、その美しさから「カリブの宝石」とも呼ばれます。人口40万人の小さな国ですが、多様な民族、言語、文化があります。

暑さ対策

ベリーズは日差しが強いので、日焼け止めが必須。風通しの良い服を着て、水を小まめに飲む習慣も忘れないでください。

お薦め料理

ベリーズの主食は、大きなお皿にチキンとサラダ、米、豆料理がのったワンプレートが定番です。こちらの朝食は日本と比べて少なめなので、研修を行った駒ヶ根訓練所の食堂の朝食は量が多くてびっくりしました。

――これまでの経歴は？

私は約25年間、ベリーズの行政機関などで広報の仕事に携わり、2019年からJICAベリーズ支所に勤務してボランティア事業に携わっています。10代の頃から外国へ行って各国の多様な文化・習慣に触れるのが好きで、日本の組織であるJICAの仕事に魅力を感じて転職しました。

――現在の担当業務は？

ベリーズ支所で働き始めて5年、これまでの知識や経験を生かして広報活動に力を入れてきました。特に、SNSを活用した発信を増やし、JICAや協力隊の取り組みが随分知られるようになりました。

また、私は隊員の皆さんが日本を出発する前から無事に帰国するまで、すべての行程に関わります。住居を見つけるための家主との交渉、配属先や官庁への表敬訪問の依頼と準備、語学研修時の学校と宿泊先の手配、そして到着後はベリーズの文化や習慣などを学ぶオリエンテーションを行い、任地への赴任時には配属先へ同行し、アパートの鍵を渡します。隊員の世話をすることは私の喜びでもあり、この国で皆さんが成長できるよう、私は自分ができるすべてのことに力を尽くしています。

――隊員に思うことは？

私は前に米国平和部隊（ピースコー）で働いたこともあり、国際連合や各国のさまざまなボランティア団体と接しましたが、協力隊の評価は群を抜いています。特に派遣先からの評価が高く、私も誇らしく感じています。日本の人たちはとても礼儀正しくて理解力があり、〝民度〟が高いと思います。ベリーズの若者たちの中には隊員の皆さんと親しくなりたいと思っている人も多く、日本の文化を紹介する「ジャパンデー」のイベントには毎年たくさんの人が訪れています。

――隊員へのアドバイス

当然のことですが、中米の文化と日本の文化はかなり異なります。日本からやって来た隊員にとって、時に不快な感情や誤解を招くこともあるため、皆さんにはよくベリーズでの人とのつき合い方についてアドバイスをしています。例えば、ベリーズでは初対面でもハグやキスをしますが、どんな場面でどのようにハグやキスをすればいいか、具体的に指導します。例えば、互いの頬を軽く擦り合わせる時、頬に軽くキスをする時など、場面によって異なります。細かいことのようですが、それは第一印象を決める重要な挨拶なのです。

隊員が活動中の老人ホームにて

JICAエジプト事務所

アミーラ・ラーファトさん

Welcome to Egypt

暑さ・寒さ対策

エジプトは暑い国というイメージがあるかもしれませんが、12月から2月はとても寒いです。雪が降るほどではありませんが、エジプトに派遣される方は寒い時に着る服も必須です！夏は暑いですが、日本に比べて湿度が低く、比較的過ごしやすいかもしれません。

私のストレス解消法

エジプトには美しい海をはじめ、野外ステージやショッピングモール、ジムなどの施設が豊富で、ピラミッドやスフィンクスなど古代文明の遺跡や博物館、美術館もたくさんあります。私自身、歴史にまつわる芸術作品や古代の金品を鑑賞するのが趣味で、自分もこの巨大な文明の一部であることに誇りを感じています。エジプトの奥深い文化に触れることでストレスも吹き飛んでしまうことでしょう。

エジプトのオススメ料理

ナイル川の水資源に恵まれたエジプトでは、野菜や果物などの農作物が豊富に栽培され、それらの素材を使った料理がたくさんあります。ぜひおいしくて体に良い料理を食べてください。

――これまでの経歴は？

私は学生時代に日本語を専攻していたので、社会人になる前からJICAの取り組みを見聞きする機会が多くありました。大学の教授から「JICAエジプト事務所に空席ができたので応募してみてはどうか？」と勧められて入職しましたが、最初は総務・経理の仕事を担い、4年ほどたってボランティア事業を担当するように。以来今日まで、20年近くにわたってボランティア担当の業務をしていて、この仕事がとても好きです。

――現在の担当業務は？

私は着任する隊員への対応から住居手配、配属先との連絡・交渉、活動を終えた隊員の帰国手続きまで、一連の業務を担当しています。エジプト事務所では隊員の皆さんの活動支援のため、ボランティア業務の関係者が参照できるワークフローシートを作成したり、Teamsで隊員や配属先に関する情報を随時アップデートして共有したりして、どの担当者でも対応でき助け合える体制づくりを行っています。

――隊員に思うことは？

コロナ禍の時には配属先から派遣再開を望む声が寄せられ、協力隊員への信頼度の高さを改めて実感しました。エジプトへの協力隊派遣は1997年に始まり、最近では特にスポーツや教育分野の隊員が多く活動中。昨年10月からは、エジプト柔道連盟の要請で大学連携で派遣された柔道隊員が活躍しているほか、政府間の「エジプト・日本教育パートナーシップ」の下で日本式教育を掲げるエジプト日本学校が51校あり、今は小学校教育や美術、音楽などの隊員が計13人配属されています。

隊員たちについて印象的なのは、地域の人々と協力して生活の質の改善や技術向上に取り組む姿勢です。各自が持つ知識や技術を相手にうまく伝えようと一生懸命に頑張っています。また、他国と比較すると、技術協力プロジェクトなどJICAが実施する他スキームと連携する案件が多く、とても意義のある取り組みを続けているとも思います。

現地校での日本文化紹介イベント

――隊員へのアドバイス

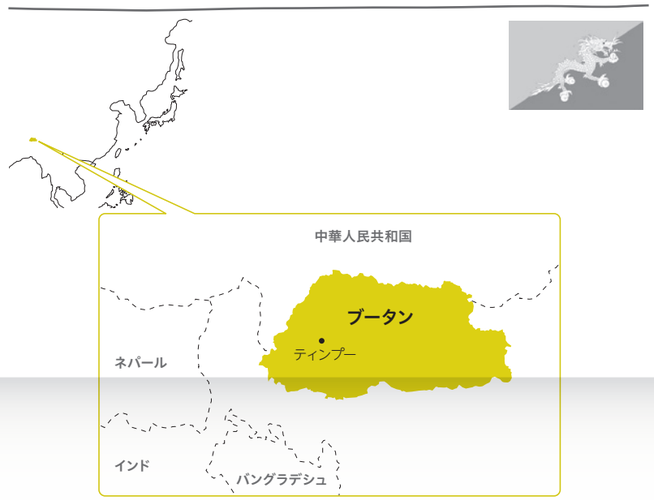
エジプトは古くからさまざまな国の文化を受け入れてきた国です。今も多様な習慣や文化を持つ人々が互いを尊重しながら共生していて、外国の人を受け入れる風土が十分にあると思います。とはいえ、エジプトに限らず、派遣される国や地域の文化、習慣、生活環境などについて事前に情報を集めるのは大切なことです。エジプトに派遣される隊員の皆さんも、現地の文化や歴史についてできるだけ派遣前から調べたり聞いておいたりするとよいでしょう。

派遣国の横顔

知っていますか？ 派遣地域の歴史とこれから〈ブータン〉

ヒマラヤ山脈に位置し、
国民総幸福量（GNH）で知られる「幸せの国」。

ブータンの基礎知識



ブータン王国

面　積：約38,394平方キロメートル（九州とほぼ同じ）
人　口：78.2万人（2022年、世銀）
首　都：ティンプー
民　族：チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
言　語：ゾンカ語（公用語）等
宗　教：チベット系仏教、ヒンドゥー教等

※2023年8月現在
出典：外務省ホームページ
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/

派遣実績

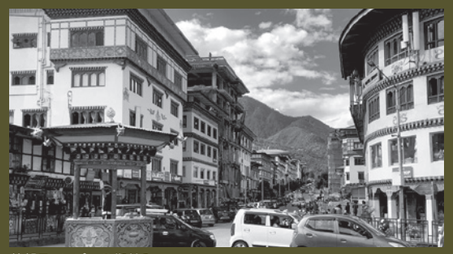
派遣取極締結日：1987年4月23日
派遣取極締結地：東京
派遣開始　　：1988年7月
派遣隊員累計　：647人

※2024年1月31日現在
出典：国際協力機構（JICA）

Text＝三澤一孔　写真提供＝ご協力いただいた各位

親密な関係の背景に協力の歴史
農業、体育など35年の派遣が国づくりを支える

正式な国交の樹立前から日本人専門家が指導に入り、多様な職種にわたる協力隊派遣は2023年に35周年を迎えた。


首都ティンプーの街並み
［写真提供＝鈴木育則さん（コンピュータ技術／2019年度3次隊）］

「幸せの国」として知られるブータン。その背景には、1970年代に先代のジグミ・シンゲ国王が提唱した「国民総生産（GNP）よりも国民総幸福量（GNH）が重要」との考え方がある。2022年のGNH指標調査でも、9割の国民がGNHの各項目の半数以上で「充足している」と回答している。

ヒマラヤ山脈の南側に位置するブータンは、北を中国、南をインドという二つの大国に挟まれながら、独立を維持してきた。1990年代末からはシンゲ前国王主導で民主化が進行した。現在もインドとの関係は深い一方、中国や米国、ロシアなどとは国交がない。

皇室との関係をはじめ、日本との関係は親密で、2011年の東日本大震災ではジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク現国王主催の追悼式が営まれ、同年、国賓として来日した国王ご夫妻は福島を訪れ、慰霊と励ましを行った。JICAブータン事務所の山田智之所長は、両国関係の背景には「23年に派遣35周年を迎えたJICA海外協力隊の活動など『協力の歴史』も大きい」と断言する。

最初のページを開いたのは、故西岡京治氏だ。国交のなかった1964年、国際協力事業団（現JICA）から農業専門家として派遣され、92年に亡くなるまで、農業の近代化や新しい作物の導入、米の品種改良などに力を尽くした。「西岡専門家は、その功績で、最高の爵位である『ダショー』を授与されました。通常、外国人にはあり得ない評価です。苦労されながら、農産物の生産量を大きく伸ばし、自分と日本への信頼を勝ち取りました」。

86年に両国の国交が結ばれ、88年、協力隊の派遣が始まった。「派遣は農業分野から始まり、西岡専門家と一緒に活動した隊員もいます。翌89年には教育、保健、職業訓練の隊員を派遣し、その後、職種は広がりました」。

ブータンでの協力隊の活動の成果の一つが、学校での「体育」教科。ブータンでは体育の授業はなかったが、「隊員の活動をきっかけに、体育の重要性が理解され、正式教科に採用されました。教員たちも体育の授業を受けた経験がないので、歴代の隊員が授業の実践方法を助言してきました」。

ブータンから協力隊への要請について、山田所長は「長い経験年数や資格が求められることが多い。中には専門家といってもいいくらいのレベルのこともあります」と話す。その背景には、協力隊や日本への信頼がある。

加えて、強い愛着もある。ブータンで公式行事に参加する時には、男性は「ゴ」、女性は「キラ」という伝統衣装を着用する義務がある。着任した隊員は、最初のゴまたはキラに仕立てる伝統的な生地を王室から贈られる。

山田所長がブータン国内で県知事などを訪問すると、「サッカーのうまかった○○隊員はどうしていますか」などと隊員の名前がすぐに出てくるという。その関係が35周年の重みでもある。

＼ お話を伺ったのは ／

山田智之（やまだともゆき）さん

PROFILE
JICAブータン事務所長。2002年にJICA（国際協力事業団）に入団。以降、JICAボランティア事業、技術教育・職業訓練、経済インフラ、中小企業など海外展開支援、民間セクター開発分野を歴任。ボランティア事業関係では、40周年記念式典に伴う国際ボランティア会議、米国平和部隊との覚書などを担当。22年8月から現職。ブータン事務所は、08～11年のインドネシア事務所以来2回目の海外駐在。

ジャージー牛の人工授精をする白木さん

平山さんが携わった、プナカ・ゾンの改修工事の様子

白木伸子（旧姓 庵原）さん

家畜飼育／2009年度3次隊・宮城県出身

PROFILE

獣医師。獣医学部に在学中、同じ繁殖学研究室で過去に協力隊に参加し、家畜の飼育に関わった先輩から経験談を聞き、興味を持った。卒業後、大動物専門病院での勤務を経て協力隊に参加。ブータンでの協力隊活動から帰国後は動物用の医薬品を扱う会社に勤務。セミナーや講習会でブータンの家畜飼育の様子や活動について話すこともあった。結婚後は北海道に移住し、夫婦で畜産業を営んでいる。

平山修一さん

建築施工／1993年度1次隊、シニア隊員／建築／2002年度0次隊・神奈川県出身

PROFILE

GNH研究所代表。一般社団法人ブータン・ハピネス倶楽部代表理事。一級建築士、一級土木施工管理技士。建設会社に勤務し、日本の高度成長を支えた職人たちから、知識と技術をたたき込まれる。「日本の経験を途上国に生かしたい」と協力隊へ。任期を終え復職した後、転職し、シニア隊員、地方行政に関する技術協力のJICA専門家などとしてブータンに長く関わる。現在、国際協力専門員としても活躍中。著書に『現代ブータンを知るための60章　第2版』（本誌P21へ）ほか。

信頼と期待を受け悩みながら紡いだ成果

先達への高い評価の中、派遣された隊員たちは、さらなる高みを目指して活動した。

旧「冬の王宮」の改築に従事 絆深め要請以上の成果に

ブータンへの協力隊の派遣が始まって5年後の1993年7月、平山修一さんは建築施工隊員としてブータンに赴いた。平山さんが着任したのは、ブータンの古都、プナカ。55年までブータンでは冬期は首都がプナカに移動していた。ブータン各地には役所の機能も兼ねた城「ゾン」がある。かつて冬の王宮でもあった内務省プナカ城改築工事現場事務所が配属先だった。

平山さんの要請内容は「コンクリート造りの城の改築」だったが、プナカ・ゾンは木造、石積み。コンクリート製の梁（はり）を組み込み、城全体の耐震性を高めてほしいとの要請だったが、「木造や石積みの構造計算はやったことがありませんでした」。初めは「新しい技術者が来た」と周りに集まってきたブータン人技術者は一人、また一人と離れていった。近くを流れる川の岸辺でため息をついたことも少なくなかったという。

わからない部分を埋めるため、隊員連絡所にあった建築技術の本を読み、「ありとあらゆる方に聞きました」。首都勤務の建築隊員や日本の技術者、ブータン政府で働くインド人技術者のもとにも押しかけた。ゾンの改修の全体像を描き、本来業務ではない川の堤防の設計もこなした。日本式の資材管理や工程管理、安全管理などを地道に指導しているうち、「平山は仕事ができる」と周囲の評価も変わっていった。

平山さんとブータン人の絆は、二つのアクシデントでさらに深まった。

その一つは、着任半年後に起きた作業員宿舎の火災。多くの作業員がぼうぜんとする中、「水中ポンプで川の水をかけろ」「中に人が残されていないか、声をかけて」と陣頭で指示を出した。火災で私財をすべて失った作業員もいたが、平山さんの的確な指示で助かった命もあった。

その半年後、隊員会議でティンプーへ上京した帰り、車をチャーターしてプナカへ戻る途中。標高3150メートルのドチュラ峠で異変に気づいた。谷底にバスが落下していた。車内の皆で救出を始めた。スコップを持って通路を整備しながら谷底に下り、負傷者を運び上げた。救出した一人はプナカの高僧だったが、ティンプーの病院へ運ぶ途中で息を引き取った。

平山さん自身はその一件を周囲に話さなかったが、やがて話が広まり、平山さんはプナカの人たちに仲間として接してもらえるようになった。「目の前のことに対応しただけ。でも、この一件の後からは仕事もやりやすくなりました」。

その後、積極的に食事は作業員の家で、一緒に食べるようにした。火災の時に着ていた一張羅のダウンジャケットは、火の粉で何カ所も穴があいたが、そのダウンを着続けた。

改修工事では、案をまとめた後に「もっと内装を工夫してほしい」「この辺りに龍のデザインが欲しい」など、さまざまな要望が出されたが、「現地の人が納得してくれる成果を出したい」と根気強く対応した。「当時の隊員の美学として、皆、『協力隊は黒子』。記録に残らなくても、相手の記憶に残ることをやる』という思いで活動していました」。

1994年当時の皇太子（現在のジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク国王陛下=左）が公務でプナカ・ゾンを訪れた際の一枚（写真提供＝平山修一さん）

工事は任期中に終わるものではなく、平山さんはブータンを離れた。2003年、シニア建築隊員として教育省で、学校の設計に取り組んでいる時、偶然にもプナカ・ゾンの落慶法要が開かれることになり、平山さんも参列した。当時の国王が「なぜこの法要の席に日本人が座っているのか」と聞いた。隣の席に座った村長が「この人がゾンを修復してくれたのです」と答えた。その言葉に、「この仕事をやり遂げてよかった」と感じたという。

21年、ブータンの留学生を受け入れている長野県の高校から「プナカ出身の留学生がいる」と連絡があった。オンラインで面会すると、その留学生は「プナカ・ゾンを修復した日本人がいたと両親から聞いています」と話した。活動の「記憶」は、しっかりと受け継がれていた。

酪農家の生活向上へ 牛の人工授精の体制改善

ブータンを代表する料理といえば、唐辛子（ゾンカ語でエマ）とチーズ（同ダツィ）を煮込んだエマダツィ。ブータンの人々はチーズをよく食べる。このため酪農業による乳製品生産は重要であるが、多くを輸入に頼っている。

2010年、ブータン中央部4県の農業分野の調査研究と普及を担うジャカール農業試験場（農業省所管）に配属、外来種の人工授精の普及により、生産性の低い在来種の品種改良を進め、生乳の生産拡大に取り組んだのが、家畜飼育隊員の白木伸子さんだ。

課題の一つはすぐに見えた。この地域では配属先以外にも人工授精を推進する機関が複数あった。配属先はジャージー種、それ以外はブラウンスイス種、在来種を対象とし、それぞれが対象牛を選定し、種類ごとに異なるスタッフが人工授精を担当していた。このため人工授精のために農家へ行ってから、「これは自分の担当ではない」と作業中止になることがあった。一方、飼育農家も、牛の品種や、どの牛が人工授精の対象かもわかっていない状態だった。これを解決すべく人工授精業務を行う複数の機関を合併し、新たな人工授精サービスセンターを設立させ、地域の人工授精業務を一手に担った。こうして農家まで行って人工授精が行われないという問題を回避した。

また移動は簡単なものではなかった。雌牛が発情すると農家からセンターへ電話が入る。朝に発情すれば遅くとも夕方までには人工授精する必要があるが、人工授精チーム専用の車があるわけではなく、各機関で4台ほどの車を融通し合わなければならない。出張に出ている車、ガソリンが切れていたり故障していたりする車もある。ドライバーの確保も必要だ。「器材を手に歩いて行ったこともありました」。

車が入れないところもあり、そうした場合は、中間地点まで農家には牛を連れてきてもらい、白木さんたちは凍結精液が入ったタンクなどの器材を積んで、中間地点に急いだ。

人工授精は、雌牛の発情を確認した上で、解凍した精液を子宮内に注入し、「種付け」をする。この作業をできるようになるにはトレーニングが必要であり経験の少ないスタッフへの教育も行った。また人工授精後、受胎したかどうかを判定する妊娠鑑定は獣医の資格を持つ人に限られるが、ブータンには獣医を養成する学校はないため、白木さんの存在は大きかった。

着任して1年が過ぎた11年3月、東日本大震災が起きた。「マダム、大丈夫？」と周囲の人たちが声をかけてくれた。宮城県出身の白木さんが「地元」と答えると、「家族は大丈夫か、とみんなが心配してくれた」という。ジャカールのお寺では「日本の人が早く回復するように」と祈る法要（プジャ）も開かれ、白木さんも参加した。一時帰国する時には、お見舞いと励ましのメッセージを託してくれた。

2年の任期が終わる頃には、牛の種別に関係なく人工授精するやり方も「このほうがいいよね」と同僚にも理解され、「仕事や技術に対する向き合い方も少し変わってきた」と感じた。

派遣国の横顔

知っていますか？
派遣地域の歴史とこれから
〈ブータン〉

山中睦子（やまなかむつこ）さん

スリランカ／婦人子供服／1988年度1次隊、SV／スリランカ／文化／2007年度0次隊、SV／ブータン／手工芸／2018年度3次隊→2021年度7次隊・栃木県出身

PROFILE

デザイン学校卒業後、アパレル業界の仕事に従事。しかし海外への興味が強く、オーストラリアでのワーキングホリデーなどを経験した後、協力隊でスリランカへ。その後、スリランカで20年近く働き、デザイン関連や国際協力関連の仕事に従事。日本の障害者施設で織物などの指導をしたこともあり、2019年1月にブータンへ派遣されたが、新型コロナウイルス感染拡大のため20年3月に帰国。現在再派遣中。

❶ぬいぐるみに綿を詰め、民族衣装のゴを着せる生徒ら
❷ヒョウの目と鼻はファブラボの3Dプリンタで作った

屋外にもマットを敷き、柔道の指導を行った

堀内芳洋（ほりうちよしひろ）さん

柔道／2014年度1次隊・神奈川県出身

PROFILE

中学・高校時代、柔道に打ち込む。インドネシアに道場をつくり、子どもたちに柔道を教えている日本人がいることを知り、現地を訪問。その後、柔道着を持ってアジアを旅するようになる。ネパールの児童養護施設では、停電中も懐中電灯の明かりをともして柔道に打ち込む姿を見て、感銘を受けた。協力隊参加後も選手を帯同して国際大会などに参加し、2019年に東京で開かれた世界選手権でもブータンの選手のコーチを務めた。

世界で競える選手の育成を目指し 本心抑えて厳しい指導に徹する

東日本大震災後の2011年11月、ブータンのワンチュク国王が王妃と共に初めて来日した。国会で「このような不幸からより強く、より大きく立ち上がれる国があるとすれば、それは日本と日本国民です」と演説し、被災地となった福島で祈りを捧げたほか、柔道の総本山・講道館を視察した。柔道経験者のワンチュク国王には「柔道を青少年教育に取り入れたい」との思いがあったとされる。

ブータン国王の講道館訪問を知り、「いつかブータンで柔道を教えたい」と思った一人が堀内芳洋さんだった。その2年後、ブータンで初の柔道隊員の募集を見つけて応募。14年7月、柔道の指導と普及のため、ブータンオリンピック委員会に配属され、柔道協会と共に活動した。

ブータンには隊員派遣の前に日本人の柔道指導者が2人滞在していたが、競技力はまだ高くなかった。「子どもたちとわいわい楽しくやりたい」という気持ちもあったが、ブータンの柔道を前に進めるため、「できるだけ厳しい指導者でいよう」と少し距離を取って接することを決めた。その方針には協会長らも同意してくれた。

道場には30～40人の子どもたちが通っていた。堀内さんは、基礎的な練習を大切にして、互いに技をかけ合う自由練習「乱取り」もみっちりやった。

練習には、ブータンの自然や文化を生かしたものも取り入れた。裏山の頂上にある寺院まで険しい道を駆け上がり、道場まで戻るというトレーニングもその一つ。「お祈りもできて、体も鍛えられるので、一石二鳥でした」。

厳しい指導を実践したが、ブータンの国民性は、「人を押しのけてでも勝つというような価値観とは正反対でした」と堀内さんは言う。リレー選手の選抜に漏れた生徒が「私、やりたかったのに」と言うと、選ばれた選手が譲ってしまうこともあったと聞いた。

モチベーションを高めるため、次に堀内さんが重視したのが、実戦の経験を積むことだった。対戦相手を求めて向かった遠征先は、以前から私的に交流のあったネパール。結果は四つのメダルの獲得、と順調な滑り出しだったが、同時に悔しさも味わった。互いに高め合う相手の存在と自分たちの可能性を知った子どもたちは、その後の稽古にも一層の熱が入ったという。

支援を受け、シンガポールや日本にも行った。試合後は、録画した試合の映像を見せて、練習に生かすようにした。国外遠征は、柔道の普及にも効果的だった。国外の試合に出場すれば、メディアでも報道された。柔道普及のために、近隣の学校や多くの人が集まる「日本週間」（日本大使館、JICAブータン事務所などが共催）で、デモンストレーションもした。伝統的な柔道の形に、音楽や器械体操、寸劇の要素も取り入れ、現地の人が関心を持つように工夫した。

ティンプーの寺院で年に1度行われるツェチュ祭の様子
（写真提供＝堀内芳洋さん）

厳しい指導がブータンに合っているのか、悩むこともあったが、その成果を確信できたのは任期が終わってからだった。帰国直後の16年8月、ブータンの世界柔道連盟とアジア柔道連盟への加盟が承認された。国外遠征を含む活発な活動が評価された形だ。公式大会に参加できるようになり、19年に東京で開かれた世界選手権には3人の教え子が出場した。さらに21年の東京オリンピックにも1人が出場し、健闘を見せた。

帰国の際、空港まで見送りに来てくれた教え子たちに「本当はもっと仲良く接したかった」と本心を打ち明けようとしたが、迷った結果、「厳しい先生」のまま、ブータンを後にした。当時の選手たちは現在、指導者として次の世代の育成に当たっている。そのうちの一人が協会長にこう言ったという。「あの時、コーチがなぜあんなに厳しかったか、今はわかる」。日本の柔道の技術と心は、堀内さんが離れた今も、ブータンで受け継がれている。

障害者施設でぬいぐるみ製作 甘えを排して品質追求

首都ティンプーにあるNGO運営の障害児・者職業訓練学校「ダクツォ職業訓練センター」に配属され、ホテルに卸すぬいぐるみなどの開発と製作の指導をしているのが、手工芸隊員の山中睦子さんだ。「好きなことをやって皆さんに喜ばれて本当に楽しい」と声を弾ませて話す。

2019年にブータンに最初に着任した時は、バッグや財布のデザインや製作に関わった。しかし、販売や受注には、なかなか結びつかなかった。

そんな中、ぬいぐるみを教えていた先生が病気のため休職することになり、上司から山中さんへぬいぐるみ製作指導の打診があった。これまでぬいぐるみの製作経験はなかったが、平面を立体にする仕事をしていたため、応用ができた。

山中さんのぬいぐるみは、国連開発計画（UNDP）担当者の目に留まり、ブータン国内にある高級ホテルからの発注につながった。

最初から、ゾウのぬいぐるみ1000個という大量発注だった。ホテルの土産物店に置かれるのではなく、アメニティとして客室に置かれ、納品した分の金額がもらえるという。

前任の先生の頃から少しずつ別のホテルにぬいぐるみを卸していたが、数量はわずかで、障害者が作った商品だからと、品質に重きを置いていなかった。このゾウの受注は配属先の誰にとっても、品質、数量共に初めての経験だった。生産者は同僚の先生たちと生徒、そして卒業生だ。山中さんは誰もが簡単に作れて一定の品質基準を満たせるようにと試行錯誤で試作を繰り返し、型紙を作り、縫製方法も熟慮した。

裁断を間違えないよう、生地ごとに型紙の色を変え、柄合わせの位置なども型紙に指示した。目や口の刺繍（しゅう）の位置、耳の位置なども専用の定規を作り統一させた。そうした準備が功を奏し、1000個分がかつてない早さで納品でき、その後も継続発注されている。

今ではブータンを代表する動物のターキンやオグロヅル、複数の絶滅危惧種や、ブータンで助け合いを意味する4種類の動物（ゾウ、サル、ウサギ、キジ）などのぬいぐるみも商品化された。

学校には、幼児から40歳くらいまで、身体障害、知的障害、自閉症、ダウン症など、約40人の障害者が通ってくる。障害の程度や適性を見ながら担当する作業を決めている。あるダウン症の男子は、ぬいぐるみに綿を詰めた後に、口を留める作業を担当した。作業に慣れ、「僕、こんなに上手になったよ」と自慢げに話しかけてきたことがあった。「すごくかわいらしかったし、嬉しかったです」。

ブータンでは、日本ならすぐに入手できるようなボタンやフックのような小物が、手に入らないことも多い。そんな時に、3Dプリンタを活用してパーツを作成してみようと、デジタルものづくり工房（ファブラボ）との連携も試みた。JICAが支援している科学技術単科大学（CST）内のファブラボCSTと連携し、ゾウの目や、国王誕生日の贈答品として短い納期で注文を受けたトラの目・鼻を作った。

納品に行ったスタッフがホテルから「ずいぶん質が変わって良くなったね。前とは違うね」と声をかけられた。山中さんの同僚からも、こんな声があがっている。「忙しくなったけど、製品の質も上がって、仕事が楽しくなった」。

残る任期、山中さんは工業用ミシンなども導入し、さらに成果を高めていきたいと考えている。

❶記念式典時の派遣中隊員28人と、ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク第5代国王（前列中央）、ロテ・ツェリン前首相（前列右から3番目）、中村俊之JICA理事長特別補佐（前列右から2番目）、カルマ・ハム・ドルジ人事院長官、鈴木浩在インド対ブータン大使（前列左から3番目）、山田智之JICAブータン事務所長（前列左から2番目）
❷ブータン国王へのJICAブータン事務所による事業説明

ワンチュク国王も参列して派遣35周年式典「日本や協力隊には愛着」のお話も

ブータンへの協力隊派遣35周年を記念し、歴史と成果を振り返る式典が2023年10月27日、JICAブータン事務所の主催で開かれ、ブータンのジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク第5代国王も参加された。日本側は、派遣中の海外協力隊員28人が1人は和服、他はブータンの正装である民族衣装、ゴまたはキラを着て参加。来賓は合わせて140人にも上った。

ワンチュク国王は「先代国王の命により、13歳で公務を始めましたが、最初の公務がJICA海外協力隊の記念式典への参加でした。この時、多くの日本人ボランティアと交流し、彼らのブータンへの貢献の様子を知ることができました」というエピソードを交え、「日本や海外協力隊へは特別な愛着を抱いている」とお話しされた。

「今回の式典でお話を聞くまで存じ上げなかったことですが、あらためて親近感を深く感じました」（JICAブータン事務所・山田智之所長）

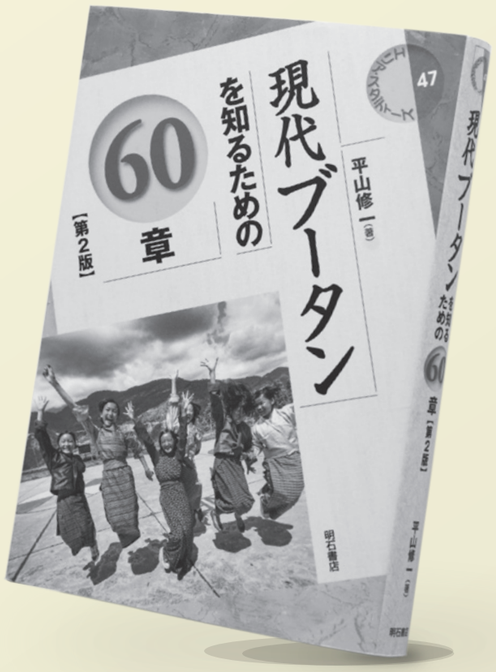
式典では、派遣中の隊員による発表、写真パネルやビデオによる協力隊事業の説明、田中明彦JICA理事長のビデオメッセージの紹介なども行われた。ワンチュク国王はこれらに耳を傾けた後、28人の隊員、一人ひとりに直接、声をかけられた。隊員の指導を受けている生徒による柔道のデモンストレーションや隊員によるソーラン節のパフォーマンスも披露された。

式典には手工芸隊員の山中睦子さんも参加した。山中さんが指導し、絶滅が危惧される動物への関心を高めるために配属先の障害者たちが作ったレッサーパンダのぬいぐるみも会場に飾られていた。ワンチュク国王は、ぬいぐるみを手に取り、「もらっていいか？」と聞かれた。「もしかすると、お生まれになったばかりのソナム・ヤンデン王女がそのぬいぐるみで遊ばれるかもしれません」（山中さん）。

国王も参加した式典の様子は、メディアやSNSで広く伝えられた。山田所長は「こうした式典に国王が参加されるのは、おそらく初めてのことと思われます。非常にありがたく、名誉なことだと考えています」と振り返る。

ブータン国王から派遣中ボランティアへのお話の様子

いま、読みたい電子書籍



現代ブータンを知るための60章【第2版】

著　：平山修一
発行：明石書店

https://www.akashi.co.jp/book/b428081.html

この方に聞きました！

著者
平山（ひらやま） 修一（しゅういち） さん
ブータン／建築施工／1993年度1次隊、シニア隊員／ブータン／建築／2002年度1次隊・神奈川県出身

時代と共に変化する国を見つめ続け蓄積した情報をアップデート

2018年、ブータンへのJOCV派遣30周年に合わせ改訂された『現代ブータンを知るための60章【第2版】』。

「シニア隊員として2回目の派遣の際に声をかけていただき、現地で執筆したのが第1版です。その後、憲法もできるなどブータンは社会的に大きな変貌を遂げました。ちょうど30周年のタイミングでJICAブータン事務所からの依頼もあり内容を大幅に書き直したのです」と著者の平山修一さん。

本書の39章「日本のODAが果たした役割」ではJICAボランティアの軌跡が加筆されており、多くの隊員たちの活躍によってブータンが発展し、また現地の人たちとの絆も築かれてきたことがよくわかる内容になっている。

「昔は、協力隊のやった仕事はあくまでも“影”とされていて、表立って『私がやりました』と言わないのが美徳とされていたところがありました。ですが、時代も変わり、これまでの経緯や活動内容を事実として書き残しておきたいと思ったのです。単に何を行ったという活動報告ではなく、協力隊の活動によってブータンの人たちの暮らしがいかに改善されたのか、日本という国で行うよりも、隊員が派遣国で行う活動の波及効果はずっと大きいということも伝えたいと」

平山さんはもともと建築隊員として派遣されたのだが、専門外である政治や経済、宗教、さらに今回は障害児教育などあらゆる方面に眼差しを向け、緻密な取材や調査を重ねて60章の項目すべてを単独で執筆している。シリーズの他の本は複数の著者で分担して書いているのに、これは驚くべきことである。

「自分の分野ではないから関係ないと考えるのではなく、さまざまなことに興味を持ち、多くの人と関わり、先のことに目を向けていくといい仕事ができるはずです。昨年は派遣35周年を迎えた年でもありましたし、そろそろこの本を踏み台にしてさらに改訂してくれる人が現れないかと本気で待っているんです。読んでただ満足するのではなく、少なくとも自身の専門分野については『ここに書かれていることなんて当たり前』と言ってほしいですね。そうやって皆がそれぞれ成し遂げたことを積み重ねていく、それが私の願いでもあります」

Text＝海原美帆　Photo＝干川 修（書影）　写真提供＝平山修一さん

専門家に聞きました！

失敗に学ぶ

現地で役立つ人間関係のコツ

今月のテーマ：自分の活動は本当に求められているのか？

今月のお悩み

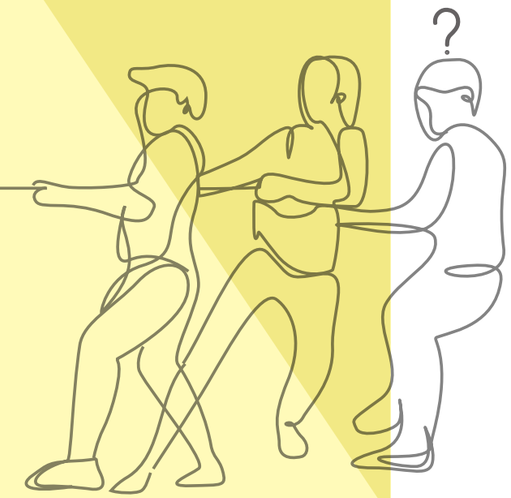
同僚たちが乗り気ではなく、自分の活動が必要なのか悩んでいます

（アフリカ／女性）

体育隊員として、現地の小学校で体育の授業を普及するという要請で派遣されました。

ただ、活動先では体育を行うための備品や設備が欠けているのはもちろん、先生や教育行政の関係者からの協力も得にくい状況があります。受験や進学に必要な科目ではない上、体育という授業自体が現地では新しい概念なので仕方ない面もありますが、私の授業実践などには賛成してくれても、積極的に参加して取り入れることは皆無。

ここで活動する意味があるのか、自信を失いかけています。



今月の教える人　堤 尚彦（つつみ なおひこ）さん

ジンバブエ／野球／1995年度2次隊、ガーナ／プログラムオフィサー／1998年度9次隊・兵庫県出身

新卒で協力隊に参加。ジンバブエで、野球隊員として学校での巡回指導や指導者の育成に取り組んだ。帰国後、大学院在学中に再び協力隊員としてガーナへ赴任し、代表チームの強化にあたる。日本国内のスポーツマネジメント会社を経て、2006年におかやま山陽高等学校の野球部監督に就任。17年、チームを甲子園初出場に導き、23年に8強入りを果たした。会社員や教員の傍ら、03年にインドネシア代表コーチを、18〜19年にジンバブエ代表監督を務めるなど、「世界に野球を広める」という目標に向けた取り組みも続けている。23年7月に著書「アフリカから世界へ、そして甲子園へ」を出版。

堤先生からのアドバイス

意外なところにニーズはあるものです 自分にできることを追求すると、見えてくるものがあるはず

私がジンバブエで活動した時の要請は、学校などでの野球の普及活動だったのですが、赴任してみると管轄省庁の理解や支援さえ乏しい状況。また、多くのアフリカ諸国と同じくサッカーが大人気で、野球はマイナースポーツとの印象がありました。

そうした中で始めたのが、地域の小学校を直接訪ねて、野球を教えたいと直談判すること。自分の要請内容や配属先の事情はどうあれ、とにかく現地の子どもたちが実際に野球に触れた時の反応が知りたかったのです。もしも本当に誰も興味を示さず、野球が必要とされないならば、いっそ任期を短縮して帰国しようかとさえ思っていました。

ですが、いざ簡単な体験練習を始めてみると、ものすごく楽しんでくれる子が多いことに驚かされました。ある少年に野球のどこが面白いのか尋ねてみたところ、「僕はサッカーが下手で、ボールに全然触れない日もあってつまらない。野球は守備でボールをつないだり、打順が必ず回ってきたりするから楽しい」という答えが返ってきました。その後、つぶしたサッカーボールでグローブを作ってキャッチボールをする子を見かけたこともあり、野球を普及させる余地があると確信できました。

サッカー一強のイメージだったジンバブエですが、実は野球のニーズもあったわけです。別に私が特殊な働きかけをしたのではなく、粘り強く子どもたちの元を訪ね続けたことが気づきにつながったのですから、一見して活動が求められていないように思えても簡単に予断を下さずに働きかけたいところです。

そのほか、配属先の受け入れ態勢の不備や、現地で手に入る物品の不足などによって活動の意義やニーズに疑問を抱える人もいるでしょうが、そんな時こそ工夫のしどころです。自分なりの取り組みの中で、チャンスや発見もあるかもしれません。

私は活動初期の配属先担当者との衝突のせいで、3カ月ほどオフィスに行けない〝謹慎〟の期間がありました。その時に思い立ったのが、現地で野球道具を作ることです。海外から取り寄せた道具は数が少なく、古くて傷んでいたりもするので、ジンバブエ人が作った道具でジンバブエ人がプレーできるようになればいいなと思ったのです。

さっそく地元の靴店でグローブを作れないかと交渉すると、多忙な店主には断られたのですが、その親類で失業中の革職人が話に乗ってくれて、試行錯誤の末、日本で売られているような23もの型紙から成る精巧なグローブを作れるようになりました。商売ベースで従業員を雇うまでになり、私もJICA事務所に購入資金の援助を依頼しつつ、活動先の学校にグローブを導入することができました。

その時に印象的だったのが、職人から「もっと野球を広めてくれ。そうしたらもっともうかるから！」と言われたことです。野球隊員といえば野球を教えることだけに目線が向きがちですが、野球の普及を通じて失業や貧困問題など、別の角度から派遣国の役に立てることもあるのだと気づかされた経験でした。

その後、1999年からの経済危機で野球どころではない時代を経験したジンバブエですが、2019年に代表チーム監督として再訪すると、誰の指導を受けるでもなく大会の準備から片づけまで自ら行う現地の野球関係者たちの姿がありました。さらに、一介の若者として私の活動を手伝ってくれたモーリスはその後も野球振興に携わり続け、今やWBSCアフリカ※のコンプライアンス委員長となっています。歴代野球隊員の取り組みが現地で必要とされた結果が残ったのだといえるでしょう。

もちろん、活動が現地で受け入れられ、結果として〝求められる〟ためは自分一人だけでやろうとせず、現地の人にもやる気になってもらうことが肝心です。私も人を引きつけることには努力を惜しまず、初対面ではできるだけ笑いを交えて話すようにしたり、伝え方を工夫したりしていました。例えば、ちょっとした説明の端々で現地の物事を引き合いに出すだけでも理解されやすいですし、喜んでもらえます。そして何より、心を開いて接することは絶対です。そうすれば、自然に人が集まってくるものです。

※WBSCは世界野球ソフトボール連盟の略で、傘下にWBSCアフリカやWBSCアジアなど、5つの大陸連盟がある。

Text&Photo=飯渕一樹（本誌）

この職種の先輩隊員に注目！

現場で見つけた仕事図鑑

#0028

「料理」

分　　類：人的資源
派 遣 中：15人（累計：181人）
類似職種：家政・生活改善、栄養士、食品加工

※人数は2024年1月末現在

CASE 1

職業訓練校の学生の食への視野を広げる

内山淳人（うちやまあつと）さん
キルギス／2019年度2次隊・神奈川県出身

PROFILE
子どもの頃から料理好き。大学で環境教育を学んだ後、料理人を目指しイタリアンレストランに就職。約7年のレストラン勤務を経て協力隊に参加し、4カ月でコロナ禍により帰国。1年間の待機中は、協力隊OB・OGと共に任地の料理を紹介する『くらして初めて知った（ど）ローカルごはん』（Amazon電子書籍版とペーパーバック版）に参加。再赴任後に7カ月間、活動した。現在、ウズベキスタンにある日本料理店の料理長。

配 属 先：第10職業訓練校
要請内容：日本料理について詳しい知識を持った教師がいない職業訓練校の料理コースで、生徒と同僚教師に日本料理の正しい調理法と味つけを指導する。また、料理の種類は問わず、現地で入手可能な食材で調理できるものを指導する。

赴任 → 中盤 → 中盤 → 帰国

「料理」隊員は職業訓練校などに配属されて、基本的な調理技術、各国料理の調理法、食品衛生管理、栄養学などを座学や実習を通して指導する。配属先のニーズに即したレシピを工夫する力、授業計画を立てる力が求められる。また、飲食業振興のためにテーブルセッティング、接客サービスなどを指導することもある。

CASE 1 実習を通じて料理人を目指す学生に諸外国の料理を教える

内山淳人さんの派遣先はキルギスの首都ビシュケクにある職業訓練校の料理コース。キルギス料理やロシア料理を教えることが主となっており、外国料理を教えられる教員がいないことが要請の背景だった。派遣から4カ月でコロナ禍により一時帰国となり、再派遣後に7カ月間、活動した。12人1グループ当たり全8回の調理実習を繰り返し、日本料理と自身の専門であるイタリア料理などを教えた。

市内には日本食や中華、イタリアン、フレンチなど多くの分野の飲食店が増え続けているが、日本料理といえば「スシ」であり、生魚の入手が難しいためカニカマやアボカドを使った巻き寿司を指すことや、イタリア料理は「ピザ」中心で、他の外国料理も知る機会が少ないこと、地方出身の生徒は外国料理に対してより保守的な傾向があることを知った内山さん。

最大のピンチ

語学力です。1年間の特別待機中もキルギス語学習を続けていましたが、再派遣後も語学力不足を感じました。調理実習の準備ではレシピの作成にとどまらず、食材購入の予算をもらうために材料の分量や価格だけではなく切り方まで詳細に記入した予算申請書を作成する必要があり、食器や道具類の手配も管理している部署に申請します。最初はそれぞれの担当部署がなかなかわからず、キルギス語がもっとできればもう少し楽だっただろうと思いました。

最高のやりがい

職業訓練校で料理実習を行う内山さん

1回の調理実習では4つの料理を作り、後片づけまで3時間で終えなくてはなりません。調理法をわかりやすく伝えられるよう、事前に食材を切って手順に沿って並べ日本のテレビの料理番組のように調理法を説明したところ、同僚教師が感心し、残してきたレシピも使って引き継いでくれています。また、キルギスでは遊牧民の暮らしを反映した羊や馬などの肉、伝統的な小麦料理などの食文化に触れることができ、料理隊員としての醍醐味（だいごみ）を感じました。

「将来、国内外で料理人として働く生徒たちに、どんな料理が日本や外国にあるのかを知って、食文化に興味を持ってもらいたいと考えました」

日本料理については、だしの取り方など基本となるものを紹介しながら、「生徒たちは好みに合わない料理をあからさまに嫌がります。実習後もまた作ってもらえるように、自分の日本料理観を押しつけないことにしました」。

校長に味見してもらってキルギス人の好みを探り、日本料理やイタリア料理、デザートまで幅広く教えた。評判が良かったのは、照り焼きチキン、チキン南蛮、ホワイトシチュー、しょうゆラーメン、天ぷら、お好み焼き、ガトーショコラなどだ。

「寿司以外の日本食に初めて触れた生徒や同僚が多く、新鮮に感じたようです。生徒たちはいつも楽しんで実習し、欠席することなく参加してくれました」

CASE 2 現地にある食材で日系社会が求める「日本料理」を

松本やよいさんの配属先はブラジル東北地域の日系団体を統括する組織で、主な活動は傘下の婦人会を対象にした和食の料理講習会の実施。中心となるバイア州は日本の面積の1・5倍。移動距離が長いため、1カ所に4、5日滞在し、材料の下ごしらえから婦人会メンバーが集まり、わいわいと楽しむ講習会になった。

巡回は、日系人のさまざまな暮らしぶりを見る機会にもなった。都市部から遠く離れた農業地帯で暮らす3世が赤道直下で工夫しながらレンコンやゴボウなど日本の根菜を栽培したり、レモンを凝固剤に自作の木型で豆腐を作っている人もいた。松本さんはそうした和食への思いに真摯（しんし）に向き合った。

「伝統的な和食の他に、親が作ってくれた家庭料理を自分も作れるようになりたい、出稼ぎに行った日本で食べたものを作りたいというリクエストがあり、100以上の料理を教えました」

日系人が集中して住むサンパウロ州とは異なり、日本食材の入手が難しい上に高価なため、うどんやラーメンの麺の打ち方や、中華まんは皮の作り方から教えた。子どもからお年寄りまで大勢で集まるパーティー好きなブラジルの文化に合わせた料理として「おにぎらず」（※）を紹介したこともある。

「酢飯が苦手な人もいるため、寿司の代わりにおにぎらずを教えると、作り方が簡単で手も汚れないと好評でした」

コロナ禍によって任期を4カ月残して帰国した松本さん。教えた料理をポルトガル語のレシピ本にするためカウンターパートと連絡を取り合って完成させ、JICAの協力によりブラジルで印刷した。その後、松本さんは日本でも自費出版し、ブラジル食材店や関係自治体で無料配布している。

CASE 2

日系団体を巡回して100以上の料理を紹介

松本（まつもと）やよい（旧姓 吉岡）さん
フィリピン／農産物加工／1974年度1次隊、SV／エクアドル／栄養改善／2010年度2次隊、日系SV／ブラジル／料理／2018年度1次隊・佐賀県出身

PROFILE
短大を卒業後、食品会社勤務を経て協力隊に参加。フィリピンで農産物加工品の開発などを行う。帰国後、病院勤務、管理栄養士の資格取得、公立大学への進学、特別養護老人ホーム勤務など多くの経験を積む。定年退職後、SVとしてエクアドルで貧困農村の子どもの栄養改善に携わる。任期中に旅行し興味を持ったブラジルで活動したいと日系SVに参加した。

配 属 先：バイア日伯文化協会連合会
要請内容：配属先に加盟している日系団体を中心にブラジル東北地域を巡回して日本料理の講習会を開催し、和食を普及すると共に、同地域の日本食レストランの料理の質向上のための支援を行う。

赴任 → 序盤 → 終盤 → 帰国

最大のピンチ

着任早々、3日間で約4万人が集まる日本祭りで日本料理の講習会をしてほしいと言われ、前日に会場に行くと、そこはゴミがたくさん散乱している部屋でした。担当者が出張中で引き継ぎがなされておらず、ガスやテーブルもなく冷蔵庫が1つあるだけ。まだポルトガル語をうまく話せなかったので、身ぶり手ぶりで掃除用具を借り、お祭りにブースを出している人たちにガスや水の引き方を聞きました。配属先スタッフは祭りの準備に忙しく手伝ってもらえず、途方に暮れました。

最高のやりがい

一番嬉しかったのは、私が作ったピーナッツ豆腐を食べた日系3世の方が「懐かしい。おばあちゃんがよく作ってくれました。何十年かぶりで食べられました」と喜んでくれたことです。それから、地方での講習会で同じ地域に2回目に行った時、レストランを経営している日系の方が「前回教えてもらったラーメンをレストランで出すようにしました」と新メニューの写真を見せてくれたこともありました。私が教えたものにアレンジを加えて、ブラジル人に好まれるものに変えていました。

講習会後に料理を味わう婦人会の方々

※おにぎらず…皿や器にラップを敷き、上にのりをのせ、中心にご飯を広げ、好みの具材を真ん中に置き、のりの四隅を寄せて簡単にまとめる、にぎらずに作れるおにぎり。包丁で半分に切って盛りつけると見た目もきれいで、食べる時も手が汚れない。

Text＝工藤美和　写真提供＝内山淳人さん、松本やよいさん

ひきつけるアイデアを共有

みんなの教材づくり&アクティビティ

海外協力隊OVが派遣国の活動や生活で実践した、お役立ちアイデアをご紹介します。

今月の先生

森永 真弓（旧姓 田上）さん（もりなが まゆみ）

（エルサルバドル／手工芸／2009年度4次隊・奈良県出身）　大学の美術工芸コースで染色と織りを学び、久留米絣の工房、市民向け工房などで技術に磨きをかけた。協力隊では米州農業協力機構エルサルバドル駐在員事務所にて、染色の素材調査、技術指導を行った。帰国後は結婚を機に熊本県に住み、博物館員として子どもたちの活動に携わる。現在は夫の森永武志さん（エルサルバドル／環境教育／2009年度4次隊）と「どんたけし農園」を運営している。

身近な植物でできる自然な色合いの草木染め

エルサルバドルで染めと織りを指導した森永さんから、今回は草木染めを教えてもらいました。

草木染めの歴史は古く、世界中の民族でいろいろな伝統技法があります。自然の植物（落ち葉、木の実、樹皮）や食材の皮など、身近なものを染料にして楽しめるのが草木染めの魅力です。

「草木染めは染めるたびに色合いが異なり、そうした個性が面白いと思います。手間と時間はかかりますが、各作業を丁寧にやるほど、作品の出来が良くなります。布や服などを素材に、自然からの恩恵を感じながら、自分で染める喜びを感じてください」と森永さんは話している。

草木染めでは染料によってさまざまな色合いが楽しめるほか、慣れてきたら柄を出す方法に挑戦してみることもできる

草木染めの道具・材料・素材

大きいステンレスかホーローの鍋2つ、もしくは鍋とプラスチックのボウル（鉄やアルミの鍋は適しません※）、温度計、はかり、ゴム手袋、軍手、トング、媒染剤（下記を参照してください）、染める布（綿、麻などの天然素材）

※鉄やアルミ素材の鍋は、染料を煮る間に金属が液に混じって、染料と反応を起こし、十分に染まらなくなってしまうため。

媒染剤について

媒染剤は草木染めで染めた染料の色を定着させるために使います。ミョウバンを溶かして作る方法が一般的ですが、さびた鉄から作ることも可能です（作り方は下記を参照）。他には銅も媒染剤になり、それぞれ仕上がりの色が異なります。

鉄媒染剤の作り方

さびた釘や鉄と、水、酢を1：1：1くらいの割合で鍋に入れて液が半分くらいに減るまで煮詰める。もしくは瓶などに入れて1週間程度置いておく。液が黒くなったらコーヒーフィルターか布でこして完成。

媒染剤の量

ミョウバン：染める布の重さに対して5～10%

鉄媒染剤：染める布の重さに対して3%

（200グラムのTシャツを染める場合、ミョウバンは10～20グラム、鉄媒染剤は6グラム）

身近で手に入るいろいろな植物で染められることも草木染めの魅力

染料となる植物

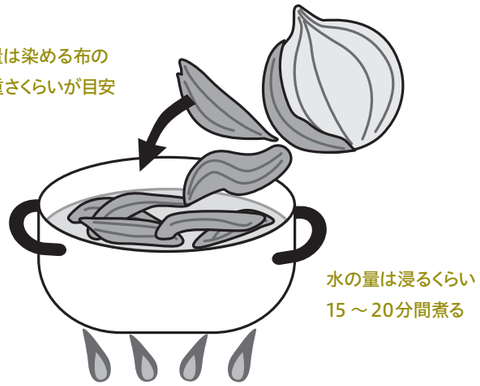
桜の葉や枝（ピンク）、黒豆（薄紫）、たんぽぽの花（黄色）、紅茶（茶色）、アボカドの皮（ピンク）、タマネギの皮（薄茶色）、セイタカアワダチソウ（黄色）、ヨモギ（緑）など。森永さんがエルサルバドルで子どもたちに教えた草木染めでは、アーモンドの葉（黄色）、ココナッツの殻（ピンク）などを使いました。現地で手に入るいろいろな植物で試してみるのも楽しいでしょう。

＼染めてみよう！／

ここではタマネギの皮を例に染め方を紹介します。

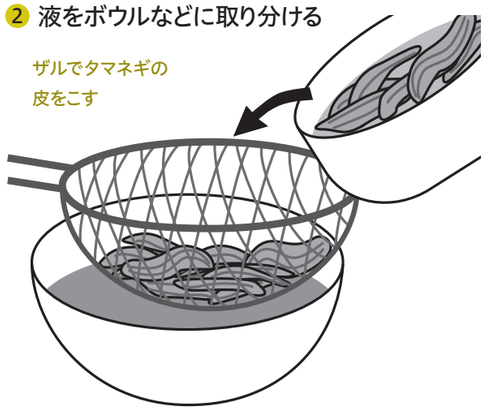
染液作り

1 タマネギの皮を鍋に入れて煮る



草木染めで作った作品を手にするエルサルバドルの子ども

2 液をボウルなどに取り分ける



3 ①②をもう一度繰り返す

同じタマネギの皮を15～20分煮て液を取り出す。
2つの液を混ぜ合わせて染液が完成。
※時間がある時は3回煮出すとより濃い染液ができる。

染め

1 染める布をお湯に15分以上漬ける

新品の布は一度洗濯して不純物を除いておく。

2 染液を80℃に温めて、その中に布を入れて染める

3 布を取り出して水洗いしてから媒染液の中に入れる

媒染液の中でも常に動かして色を定着させる。

4 布を取り出して水洗いして、もう一度②③を繰り返して完成

濃い色にしたい時は再び染めて媒染、染め…を繰り返す。
（最後は染液で終えるようにします）

〈熱いお湯や布でやけどしないように注意してください〉

先輩隊員の

シューカツ記

帰国後、内定までの
就職活動の方法を聞きました。

仕事を通じて地球環境に寄与できるそれがやりがいにつながっています

今月の先輩

横井隆宏さん Takahiro Yokoi
モザンビーク／PCインストラクター／
2016年度3次隊・北海道出身

就職先：アムコン株式会社

事業概要：汚泥脱水機、各種排水処理装置などの開発製造販売、給排水設備メンテナンス、汚泥・水質・環境の各種分析などの事業を展開。世界15の国と地域に販売代理店を持ち、77カ国にサービスを提供している。

横井隆宏さんの略歴：
1987年　北海道生まれ
2012年～16年　民間企業に勤務
2017年　1月 協力隊員としてモザンビークに赴任
2019年　1月 帰国
2019年　7月 アムコン株式会社入社

JICA海外協力隊ウェブサイト
「進路開拓支援のご案内」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/index.html

大学時代に1年間、ワーキングホリデーを利用してカナダで生活し、海外で仕事をすることに漠然と憧れていたという横井隆宏さん。大学卒業時に協力隊に応募したが不合格だったため、海外進出を計画している中小企業に就職し、仕事の傍ら夜間の専門学校でプログラミングの勉強をしていた。しかし、たまたま出会った協力隊経験者から、協力隊の職種でPCインストラクターの要請が多いと聞き、再度チャレンジした。

任地はポルトガル語圏のモザンビーク。市長が暗殺されるなど情勢が不安定になることもあったが、不安はあまり感じなかったという。

「モザンビークの人はとてもフレンドリー。顔見知りになると、僕が危険な目に遭わないように、危ない場所や人の情報を教えてくれるのです。人とのつながりが大事だと、この時に強く感じました」

初等教員養成学校での活動は、授業時間の不足などの困難もあったが、PCに関心が高い生徒への補習やPCの修理など、できることをやり遂げた。

任期中にJICAの「PARTNER」を利用して企業を探し、モザンビークに進出して養殖を行う日系企業から内定をもらい、任期終了後は再びモザンビークに渡航する予定でいた。しかし、思いも寄らない災害によって企業の経営が悪化してしまい、内定は取り消しに。

「30歳を過ぎていたので焦りました」と、すぐに就職活動を再開させ、アムコン株式会社への就職を決めた。

同社は排水処理装置などを開発製造するメーカーだが、そこでの仕事のやりがいを横井さんは「装置を売ることで地球環境に寄与できること」と語ってくれた。「いつかはアフリカにも拠点を出し、環境の改善に貢献できたら」と思いは膨らむ。

そして、横井さんには素人落語家という意外な顔もある。

「仕事の他に趣味も持とうと始めましたが、いずれは協力隊の経験を落語にしたいという夢も持っています」

1 協力隊時代　2017年1月～2019年1月

卒業式で生徒たちと記念写真に納まる横井さん

モザンビーク北部にある初等教員養成学校で、生徒と同僚教員にPCの指導をすることが要請内容でした。授業計画にはオフィスソフトからプログラミングまでの指導とありましたが、カリキュラムではPCの授業は1年次の2カ月間だけ。PCの電源を入れたことがない生徒が半数を占めていたため、目標達成は困難でした。授業のない期間は、PCルームの運営を任されていました。そこにはPCに興味を持つ生徒たちが集まってくるので、授業とは別に分解と組み立てを教える補習などを行っていました。先生方へも、会議の資料のフォーマット作りの指導などを行いました。

2 民間企業に内定　2019年1月

任期が終わる少し前からモザンビークのNGOや日系企業に、求人の有無を問い合わせました。その中で、モザンビークに法人を設立する日系の養殖会社から内定をもらうことができました。正式採用は、任期終了後に日本で面接を受けてからだったため、帰国後に連絡を待っていたのですが、その間に、モザンビークを襲ったサイクロンにより養殖場が全滅してしまい、経営が悪化して内定は4月に取り消しになりました。

3 転職活動　2019年4月

日本に帰国していたので、就職先を民間企業に絞り、イチから就職活動をスタートさせました。英語とポルトガル語が使えることに加え、前職の製造業（生産管理・品質管理）での経験が自分の強みなので、それらの経験が生かせる会社であること、また、前職の経歴から中小企業での働きやすさに魅力的なイメージがあったため、中小企業に絞り、業種を限定せずに転職サイトで「グローバル」「中小」などの語で検索し、ホームページの会社情報から面白いと感じたところ数社にエントリーしました。

4 書類提出　2019年４月

会社のホームページから履歴書と職務経歴書を提出しました。自己PR欄は語学や製造業での品質管理の経験に加え、協力隊については活動を通じて仕事がなくても自ら課題を見つけ行動を起こすなどの問題解決能力を身につけたことなどを書いたと思います。

5 面接　2019年４月～5月

1回目はオンライン、2回目は対面での面接でした。1回目の面接では、ポルトガル語と英語をどのくらい話せるのか質問されました。2回目の面接では、海外営業では機械、電気、業界についての理解が必要になるが、新しい知識を学べるか、また、すべてを一人で行うことになるが大丈夫か、などを聞かれました。そして、2回目の面接があったその日に採用の連絡がありました。実は１回目の面接では、海外営業を任せるには若すぎるのではないかという声が社内であったのですが、２回目の面接で大丈夫と判断されたそうです。

2019年5月　採用決定 ▶ 7月 入社

現在の仕事

現在の所属は海外営業部です。弊社は機械メーカーなので、販売して終わりではなく、その後もメンテナンスや修理などが必要になります。国内ではそれぞれ専門のチームがありますが、海外営業部はそれをすべて一人で担当します。一つの国に滞在するのは2～3カ月。1年の半分は、スーツケースと工具箱を持って海外を移動しています。扱っている製品は安価なものではありませんが、顧客が困っていることに対して修理や買い替えなど最適なソリューションを提案することに、面白さを感じています。入社してすぐにコロナ禍となったため海外に行けず、約3年間、国内の各部署で研修を兼ねて勤務しましたが、その経験も生きています。

アメリカ出張の時の写真。後ろに見えるのがアムコン株式会社の製品

後輩へメッセージ

英語やポルトガル語を使いたくて海外で仕事をしたいと思っていましたが、最近感じるのは、語学力は武器ではないということ。会話だけならChatGPTなどでできます。人間関係をつくるために必要なのは、語学力よりも人間力。語学がほとんどできずにモザンビークで生活した協力隊の活動は、そのための貴重な経験でした。協力隊の活動では、自分のやっていることが役に立たないのではないかと落ち込むこともあると思いますが、それもチャレンジ。何かアクションを起こす行動力が、その後の進路にもきっと役立つはずです。

Text＝油科真弓　写真提供＝横井隆宏さん

派遣から始まる未来

進学、非営利団体入職や起業の道を選んだ先輩隊員

▶養蜂・養豚・栽培の会社をルワンダで起業

木下一穂さん Kazuho Kinoshita
ルワンダ／野菜栽培／2012年度3次隊・東京都出身

第1回JICA海外協力隊 帰国隊員社会還元表彰
アントレプレナーシップ賞

❶協力隊時代。ホームステイ先の家族と木下さん
❷ルワミッツの農園にて従業員たちと
❸ルワミッツの蜂蜜は味が濃くておいしい。夜、ミツバチが寝ている間に、巣箱から巣枠を取り出して少しずつ採蜜する

持続性と効率性を両立する循環型農業でルワンダの農業に貢献

ルワンダで養蜂・養豚・マカダミアナッツの生産・販売を行う会社RWA MITTU Ltd.（ルワミッツ）を設立して9年。化学肥料や農薬に頼らない循環型農業を確立させ、従業員が安心して働ける環境づくりに力を入れるなど、持続可能な農業と経営に挑戦し続けているのが木下一穂さんだ。

木下さんが協力隊員としてルワンダに赴任したのは29歳の時。大学の農学部を卒業し、飼料会社やトマト農園で働いた後だった。

配属先はルワンダ・カヨンザ郡庁。トマトのビニールハウス栽培を行う3エリアの共同農場で農業支援を行った。その過程で自分のやりたいことが明確になっていったという。

「トマト栽培では一時的にいい成果が出ましたが、生活のために興味のない農業をするしかない人たちに農業を教え、継続した成果を残すのは難しいと感じました。自分に支援は向いていないと気がつき、自分で農業をやりたい気持ちが強くなっていきました」

ではその農業をどこでやるか。日本かルワンダか、悩んだ末に木下さんはルワンダを選んだ。帰国してすぐルワンダに戻り、2015年3月、立ち上げたのがルワミッツだ。「2年ではできなかったことが多く、もう少しここで農業がしたいと思いました。起業するための就労ビザの申請には苦労しましたが、この国の生活や文化を知っていたこと、隊員時代にどの生活レベルまでなら大丈夫か、自分の中に基準ができたことも大きかったです」。

現地で3ヘクタールの土地を買い、工夫して仕事ができそうな若者に声をかけて従業員を10人集めた。まず始めたのは、さほど初期費用がかからない養蜂。ミツバチの蜜場とするため、マカダミアナッツ、アボカド、レモンなどの樹木を植え、畑の雑草を食べてもらうために豚を半放牧で育て、豚の糞は農場の肥料に。結果的に農薬や化学肥料に頼らない循環型農業が形になった。収穫した蜂蜜や作物は提携レストランに直接卸し、豚はトラックに載せ、コンゴとの国境沿いにある競り場に持っていく。ルワンダの市場で取引するよりも、コンゴ人に1頭単位で買ってもらったほうが効率的かつ高値で売れるからだ。近年は政府機関や日本の農業高校と技術提携し、交配や良質な飼料によるデュロック種の豚の品質向上にも力を入れている。ルワンダのブランド豚を確立し、安定した供給体制を構築したい考えだ。

「味だけでなく、作り方も注目される時代において、無駄がなく環境に配慮した農業は価値があると思います。不正が横行しているルワンダでは特に品質の良いものには高い価値がつきます」

一方、事業を進めていくには信頼できる従業員が必要となる。

「家族のことで休んだり、病院代や子どもの学費がないという理由で金品を盗んだりすることがよくあって、起業して3、4年の間は従業員の問題に頭を悩まされました。そこで、従業員と家族の医療費と教育費は会社が全額負担することにしたのです」

従業員が安心して長く働ける環境を整えたことで問題は徐々に減り、社員の定着率も上がった。日頃から「合わなかったらいつでも辞めていい」と伝え、副業も認めている。

「1年目に雇った従業員10人のうち、9年目の現在残っているのは6人です。お互いに必要としているからこそここまで続いているのだと思います。今では僕のほうが助けてもらうことも多く、成長を感じられて嬉しいです。得意分野の技術を身につけ、エキスパートを目指していってほしいと考えています」

結果が出るまでに時間がかかり、失敗もあるといわれる農業をルワンダで長く続けられているのはなぜか。

「日本より規制が少なく、自分の好きなように試行錯誤できるのが面白い。それが循環型農業につながり、リスクヘッジにもなっているのだと思います。経費をかけなければその分事業が長く続けられる。まだまだできることはたくさんあります」

自らの農業を究めるために学びと挑戦を続けたことで、新たな景色も見えてきた。

「今、注目しているのは昆虫です。もともと豚のたんぱく源として、ハエの幼虫を飼料に混ぜていましたが、さらにハエの幼虫を利用して家畜の糞や食品残渣（ざんさ）などの有機廃棄物を肥料に変えるという仕組みをつくろうと考えています。食料が高騰し、食糧危機が叫ばれる中、質の高い肥料は農作物の生産増に貢献するはずです」

Text=秋山真由美　写真提供=木下一穂さん

木下さんの歩み

1983年2月、東京都に生まれる。

ニュージーランドで羊農家をしている親戚の影響で農業に興味を持つようになりました

2007年3月、明治大学大学院農学研究科を卒業し、肥料会社で3年半働く。その後、農事組合法人和郷園で2年間農業修行。トマトを栽培する。

土地もノウハウもない自分が日本の農業に新規参入することへの難しさを感じていました。土地を動かすことはできませんが、自分はどこへでも行ける。せっかくなら海外も視野に入れようと考えるようになりました

2013年1月、協力隊員としてルワンダへ。

1年目は順調でしたが、2年目から同じ作物を育て続けることによって土壌の成分が偏る連作障害が起こってしまって。ルワンダでは消毒薬も肥料も高価で簡単には手に入らないため、対策としてトマト畑にキャベツを植えて二毛作にしました

2015年3月、ルワンダ北東部のニャガタレ郡にてRWA MITTU Ltd.（ルワンダ＋蜂蜜の意）を設立。

就労ビザ申請時、窓口担当者に、実態を見せろと言われたので現地で3ヘクタールの土地を買い、再び申請に行ったら今度は、勝手なことをするなと言われ、賄賂を要求されました。今思えばだまされたと感じるような出来事もあり、協力隊員として滞在するルワンダとビジネスの場としてのルワンダは全く違うことを痛感しました

現在、新しくツリートマトの栽培や、昆虫を利用した肥料・飼料の開発などにも取り組む。

自分が持っている知識だけでやっていくのは大変。大学でもっと学んでおけばよかったと思うこともたくさんあります。ただ、ビジネスは実績が大事。他の人をマネするより、自分の得意なこと、好きなことをやっていくほうがうまくいきます

今年はルワンダの首都キガリでカレー店をオープン予定

INFORMATION

JICA青年海外協力隊事務局からのお知らせ

高村正大外務大臣政務官（右）より、一人ひとりに感謝状が授与された

NEWS

各国で活躍したJICA海外協力隊70人が出席 帰国した隊員への外務大臣感謝状授与式

2023年11月29日、外務省飯倉公館（東京都港区）で外務大臣感謝状授与式（外務省主催）が開催され、任期を終えて帰国した隊員70人が出席しました。授与式は、コロナ禍を経て、約4年ぶりの開催となりました。来賓として、JICAボランティア事業を応援する国会議員や現職参加した帰国隊員の所属先代表者も参加されました。高村正大外務大臣政務官は冒頭の挨拶で、草の根外交官として現地の経済や社会の発展、相互理解の促進に貢献した帰国隊員をたたえ、一人ひとりに感謝状を授与しました。

RECRUIT

JICA海外協力隊（連携派遣）提案募集中！ ～職員や社員、学生を海外の環境で鍛えてみませんか？～

2024年度のJICA海外協力隊（連携派遣）の提案を受けつけています。JICA海外協力隊（連携派遣）とは大学や自治体、民間企業などがJICAと連携し、それぞれの組織の職員や社員、学生などをJICA海外協力隊として派遣する制度です。派遣期間中はJICAが提供する各種待遇と安全・健康管理など、安心のバックアップ体制でサポートいたします。参加者は、日本では経験できない途上国の厳しい環境で成長し、現場経験を通じて「交渉力」「突破力」「実現力」「コミュニケーション能力」など、さまざまな力を身につけることができます。帰国後も即戦力候補として活躍が期待されます。

詳細は以下のQRコードをスキャン、またはJICAのウェブサイトをご確認ください。

https://www.jica.go.jp/volunteer/relevant/company/cooperation/index.html

REPORT

第7回全国OV教員・教育研究シンポジウム開催

2024年1月7日に「第7回全国OV教員・教育研究シンポジウム　協力隊を日本の文化にしよう～つながろう！つなげよう！未来の教育と未来の自分たち～」がハイブリッド形式（会場：JICA東京）で開催されました。主催は全国OV教員・教育研究会（※1）と国際協力機構（JICA）で、文部科学省、東京都教育委員会、ESD活動支援センター（※2）に後援を頂きました。4年ぶりの対面を含めた開催となり、国内外で教員を務める協力隊OV、派遣中の隊員、協力隊参加を目指す教員など約120名が参加しました。シンポジウムでは帰国隊員による実践発表「協力隊経験を未来につなげるために」や東京都市大学・佐藤真久教授による講義のほか、テーマ別グループワークでは、国際理解教育、多文化共生教育、教科学習における協力隊経験の生かし方について、活発な意見が飛び交い、積極的な情報交換がなされました。

※1 教育関係の職種のOB･OGを中心に構成される会。教育現場で協力隊経験を生かすための活動を行っている。 ※2 ESD（持続可能な開発のための教育）活動を支援する組織で、環境省と文部科学省が設立。

クロスロード ［ 2024年3月号 ］

第60巻第2号　通巻694号
発行日　2024（令和6）年3月1日

編集・発行：独立行政法人国際協力機構
青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1竹橋合同ビル

制作協力：一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-28-7昇龍館ビル2階
ロゴタイプデザイン・誌面デザイン：(株)AND
印刷・製本：弘報印刷(株)　校正：佐藤智也

『クロスロード』は、JICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

本誌へのご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集中です。

今号の『クロスロード』はいかがでしたか。ぜひご意見やご感想を編集室のメールにお寄せください。「こんな記事があれば派遣先で役立つのに」「こんな記事なら読みたい」といったご要望やアイデアも随時募集しています。

『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

編集後記

日本一時帰国時に対面取材した、P30-31の木下一穂さん。特別に味見させてもらったルワミッツ特製の蜂蜜レモンは、「蜂蜜ってこんなに濃いの!?」と驚くほどおいしかった！（干川美奈子）

P24-25「仕事図鑑」で取材した松本やよいさんが現地で作り、日本で自費出版したブラジル料理レシピ集は圧巻です。料理男子なので参考にしたいところですが、ポルトガル語が読めず断念。（阿部純一）

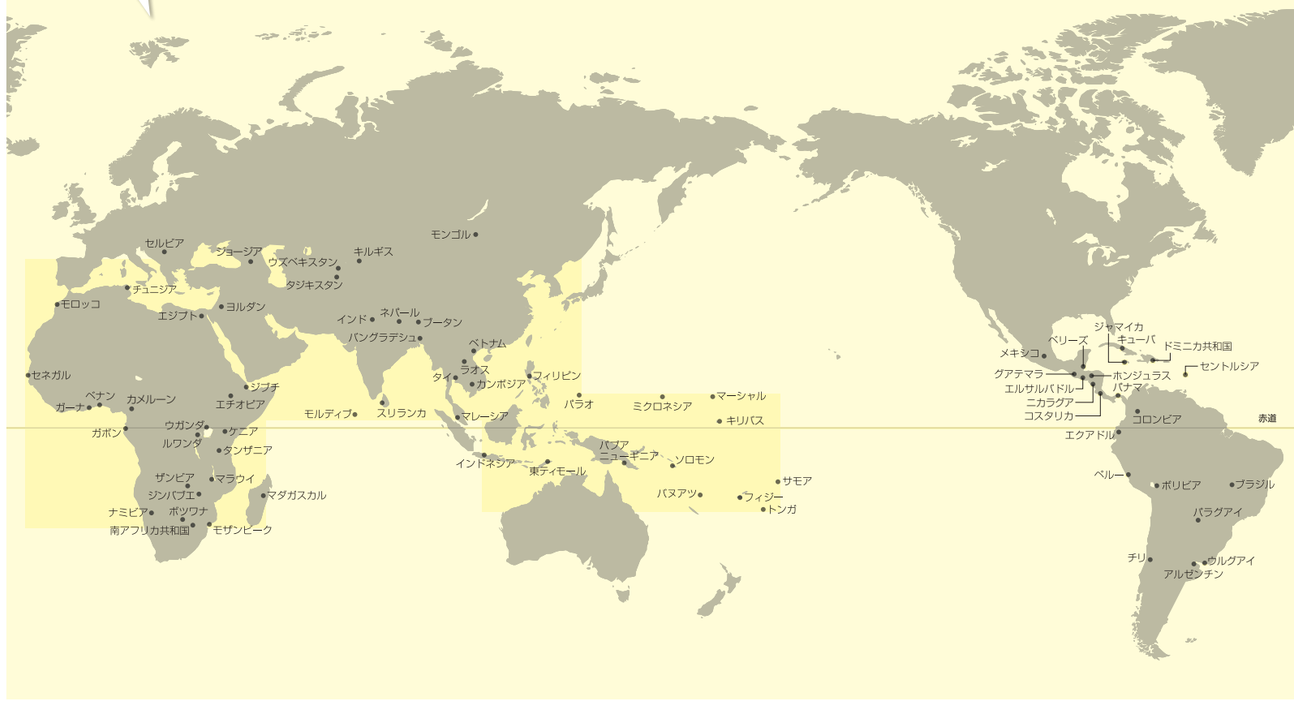
特集でナショナルスタッフの研修に密着。3日間駒ヶ根訓練所にも滞在し、訓練生との交流もありました。10年前に訓練をしていた自分を思い出し、初心に帰ることができました。（飯渕一樹）

●本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。　●本誌に掲載されている記事等の内容は、協力隊員（OV含む）の個人的見解であり、JICAの公式見解を示すものではありません。

JICA海外協力隊派遣現況

（2024年1月末現在）

現在の派遣国数
74カ国



（単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	20	3
エチオピア	4	
ガーナ	49	
ガボン	8	1
カメルーン	19	
ケニア	34	
ザンビア	16	1
ジブチ	10	
ジンバブエ	8	
セネガル	24	
タンザニア	9	
ナミビア	12	
ベナン	17	
ボツワナ	30	3
マダガスカル	23	
マラウイ	27	
南アフリカ共和国	8	1
モザンビーク	36	1
ルワンダ	40	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	19	
インドネシア	27	
ウズベキスタン	16	3
カンボジア	33	
キルギス	30	
ジョージア	6	2
スリランカ	21	
タイ	28	4
タジキスタン		1
ネパール	2	
バングラデシュ	2	
東ティモール	21	
フィリピン	9	
ブータン	27	5
ベトナム	39	
マレーシア	17	6
モルディブ	2	
モンゴル	30	3
ラオス	21	3

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	1	1
ソロモン	14	
トンガ	1	1
バヌアツ	6	
パプアニューギニア	5	
パラオ	29	5
フィジー	12	
マーシャル	1	2
ミクロネシア	1	1

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	28	
チュニジア	15	2
モロッコ	30	1
ヨルダン	27	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		4	1	3
ウルグアイ		7		
エクアドル	25	3		
エルサルバドル	19			
キューバ		2		
グアテマラ	30	1		
コスタリカ	16			
コロンビア	17	5		
ジャマイカ	5			
セントルシア	11			
チリ	12	2		
ドミニカ共和国	15		6	
ニカラグア	10	2		
パナマ	8	2		
パラグアイ	19	2	4	
ブラジル			45	3
ベリーズ	11			
ペルー	35	1		
ボリビア	31	2	1	
ホンジュラス	27			
メキシコ	10	9		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中（男性／女性）	1,222（507／715）	93（76／17）	57（25／32）	6（3／3）	1,378（611／767）
累計（男性／女性）	47,402（24,978／22,424）	6,678（5,392／1,286）	1,607（623／984）	554（256／298）	56,241（31,249／24,992）

一般 ＝ 青年海外協力隊／海外協力隊　シニア ＝ シニア海外協力隊　日系一般 ＝ 日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊　日系シニア ＝ 日系社会シニア海外協力隊

任地の思い出を聞きました。

あの日、地球の、あの場所で。

インド伝統のお祭りで燃える悪魔にびっくり！

さまざまな文化の伝統が取り込まれているインドには、多くの祭りや宗教行事があります。春の訪れを祝うホーリーで近所の人たちと色つきの粉をかけ合ったことや、ヒンドゥーの正月であるディワリの時に配属先で日本語を学ぶ生徒たちが、飾り絵に「ハッピーディワリ」と頑張って日本語を書いてくれて感激したことなど、たくさんの思い出ができました。

そんな中でも驚かされたイベントの一つが、10月ごろに開催される一大祭典、ダシェラです。10日間ほど続く祭りのラストが、悪魔をかたどった高さ10メートル近い張り子の像を燃やすというもの。

当日の夜、外出先から自宅のアパートに帰ってくると、ちょうど近くの広場でも悪魔像に点火するところでした。表面に火花が走ったかと思う間にバッと炎に包まれて一瞬で焼け落ちる悪魔！そしてゴミだらけの地面にバラバラ降り注ぐ火の粉！その迫力にあぜんとし、火事になるんじゃないかと焦ったのは私だけで、周りの人々は大歓声でした。

そして、まだ煙を上げて燃え続ける残骸に道をふさがれて帰れないことに閉口しつつ、1時間ほど町をさまよってやっと帰宅すると、近くで大きな火柱が上がったにもかかわらず「ベランダから動画撮ったよ！」と手放しで喜ぶ隣人にまた驚かされてしまいました。

翌朝、黒焦げの骨組みを残して町はすっかり平常モード。とても派手で熱狂的にお祝いをするのに、終わってしまうとあっさりして引きずらないのも、インドの流儀なのかもしれません。

Illustration＝牧野良幸　Text＝飯渕一樹（本誌）

福西真実（ふくにしまさみ）さん　JICA奈良デスク
インド／日本語教育／2016年度4次隊・奈良県出身

任地の食生活に彩りを！

隊員めし

＼教える人／

堀内好夫（ほりうちよしお）さん
チュニジア／バレーボール／1981年度2次隊・秋田県出身

大学卒業後、青年海外協力隊員としてチュニジアに派遣。任期終了後、JICAチュニジア事務所ボランティア調整員を経て、国際協力事業団（現JICA）に入団。ニジェール事務所長やブルキナファソ事務所長、JICA地球ひろば（広尾センター）次長、駒ヶ根青年海外協力隊訓練所所長などを歴任。現在、JICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所で専門嘱託として語学担当に従事するほか、訓練所の歴史資料を掘り起こし新たに展示コーナーも設置した。

今月の料理

From Tunisia

サクサクッ・とろ～り チュニジアの家庭料理 ブリック

●材料（10人分）

春巻きの皮	10枚
ツナ缶	1缶
冷凍あさりやシーフードミックス（水煮缶も可）	200g（お好み量）
生卵	10個
揚げ油（できればオリーブオイル）	適量
レモン	2個半
バゲット	1本

●レシピ

❶ 冷凍あさりやシーフードミックスに火を通しておき、水気を切ったツナと混ぜる
❷ 春巻きの皮をおわんに広げ、くぼんだ部分に生卵を落とし、その上に❶をのせる
❸ 春巻きの皮を三角形になるよう二つ折りにする。この時、皮の両端の内側に少量の水をつけると皮同士がくっつき揚げやすくなる
❹ フライパン（または鍋）に❸が浸るくらいに油を入れ、180℃程度に熱したら、❸を入れ、卵が半熟くらいの状態で揚げる（揚げ過ぎないよう注意）
❺ バゲットとレモンを添えて完成

<アドバイス>

❶ の具材はいろいろあり、ゆでてつぶしたじゃがいもに塩、コショウ、パセリのみじん切りを混ぜたものが一般的です。脂身の少ない鶏肉を割いて具にすることもあります。飲食店のブリックはチーズ入りもあり、これもおいしいです。皮が薄く破れやすいので、具材を用意しておき、❹で油に入れるまで、手早く作りましょう。❺で食べる時には、三角形の底辺の両端を両手でつまみ、中央の卵の部分を一口食べ、そこにレモンの汁をかけるのがチュニジア流です。皿にこぼれた卵はバゲットで拭きながら食べます。ブリックは前菜にあたり、この後メインデッシュやクスクスを食べます。

毎年10月に駒ヶ根で行われる「みなこいワールドフェスタ」のワールドレストランコーナーで、毎年ブリックを提供しているが、このレシピは堀内さん考案のもの。駅前通りにも協力隊OVによる各国料理の屋台が並ぶ（写真は2023年時）

レシピ・写真提供＝堀内好夫さん　Text・再現料理＝ホシカワミナコ（本誌）　Photo（再現料理）＝干川 修

クロスロード
2024年3月号
2024年3月1日発行（毎月1回1日発行）第60巻第2号 通巻694号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

＼公開！／

私の派遣国生活

［フィジー］

平井優子（ひらいゆうこ）さん
（高齢者介護／2023年度7次隊・大阪府出身）

暮らしている市、町、村

スバの街の様子。「着任当初は都会なので驚きました」

スバの市場は通勤に利用するバススタンドの近くにある。「帰りに寄って食材を買うのに便利です」

首都スバはフィジー最大の都市です。いろいろな物が手に入るので、普段の生活で困ることはありません。インド、中国、韓国、日本など各国料理のレストランもあり、バラエティー豊かな食を楽しんでいます。大きな市場があって、ありとあらゆる野菜や果物、食材が手に入ります。住まいの近くに「アルバートパーク」という広い公園があって、その少し先に海沿いの道があり、休日にはそこをウォーキングして、植物公園を通って帰ってくるコースを気に入っています。

活動の様子

施設の車椅子の修理をする平井さん

公立の高齢者介護福祉施設に赴任して、主に入居している高齢者への介護やレクリエーションの提供をする要請です。でも、私が一番力を入れているのが、車椅子の修理です。施設の車椅子は、ブレーキが壊れていたり、パンクしていたりしても修理されず、動きが悪い車椅子を持ち上げながら移動させたりしているのですが、それはとても危険なことで、事故が起きかねません。そこで、同じ地域で活動している元エンジニアの隊員に修理をお願いし、私も修理の方法を教えてもらいました。現在は、空き時間を見つけては車椅子の修理をしています。利用者さんから「ありがとう」とお礼を言ってもらえるのがとても嬉しく、やりがいを感じます。

食べ物

フィジーはインド系住民が約40%を占めていて、カレーや軽食を提供するインド料理の店も多い

施設の利用者さんから教えてもらった料理が気に入っています。その方のオリジナル料理なのですが、キャッサバをつぶして、刻んだパクチー、塩コショウを混ぜて、油で揚げたものです。ハッシュドポテトのような食感でおいしいです。職場では10時の休憩と、お昼ご飯の時に、スタッフの方々とおしゃべりしながら食べていますが、フィジーではシェアする文化が根づいていて、持ち寄った食べ物を皆で分け合います。それぞれの家庭の味を食べられるのが楽しいです。夕食はほとんど自炊で、スバの市場で仕入れた食材でいろいろな料理を作っています。

平井さんが施設の利用者さんから教えてもらってフィジーで一番気に入った料理

住まい

平井さんが暮らしている部屋。「想像していたよりきれいな部屋で、ありがたく思っています」

3階建てのアパートメントで独り暮らししています。部屋は広いワンルームで、キッチンがついています。洗濯機があり、シャワーもお湯が出るので、快適に生活できます。エアコンもついているのですが、使ったことはありません。夏の暑い時期は30度を超しますが、天井のファンを回せば十分にしのげます。部屋の一角に棚があって、現地の花や、民芸品のマスク、木彫りのカメを置き、壁には木の皮に模様を描いた伝統的な飾りをかけています。

フィジーの民芸品などを飾ったお気に入りのスペース

写真提供＝平井優子さん　Text＝阿部純一（本誌）

ミックス 責任ある木質資源を使用した紙 FSC® C016722
VEGETABLE OIL INK
UD FONT 見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。
ジャイカ JICA